

大師山横穴群

1976

伊豆長岡町教育委員会

大師山 橫穴群



序

大師山横穴群発掘調査報告書の発刊によせて

伊豆長岡町千代田区の大師山の中腹に南面し開口している横穴群は古くより江間の石棺として広く知られており、地域住民は貴重な文化遺産として、今迄町文化財専門委員を中心にその保存に努力して参りました。そして昭和49年秋になって県文化財保護専門審議委員斎藤忠博士（大正大学教授）及び長岡 実氏（三島北高校長）を調査顧問として県・町教育委員会の主催により調査が実施されたものであります。

今回関係者のご努力によりその報告書が刊行される運びとなりました事は誠に慶賀に堪えません。ここに現地調査並びに報告書作成にあたられた諸先生方に対し、深甚なる謝意を表すると共に、本報告書が本町及周辺地域の古代史を知るための好資料として広く活用される事を切望してやみません。

伊豆長岡町長

松 本 重 造

例　　言

1. 本書は昭和49年11月20日より、同年12月1日まで、静岡県教育委員会・伊豆長岡町教育委員会の共催により実施した大師山横穴群の調査報告書である。
2. 本横穴は從来、江間の横穴・珍場の横穴・千代田の横穴等の名で呼ばれていたが、町名変更等により現在そのような字名はなくなり、横穴群の呼び方が混乱しているので、横穴群が存在している小字の名をとり「大師山横穴群」と呼ぶこととした。
3. 本調査は静岡県文化財専門委員、斎藤忠・長田実尚氏を調査顧問として、県教育委員会職員、池谷和三・山下亮・平野吾郎・佐藤達雄によって実施された。なお本調査は大正大学学生・黒沢彰哉・大矢昌彦両君の応援を得た。
4. 調査資料の整理は、平野・佐藤が協力して行った。図面・実測図・写真等は静岡県教育委員会に、又出土資料は伊豆長岡町に保管される。
5. 本書の執筆分担は次の通りである。

斎藤 忠 Ⅳ

平野吾郎 I、II、III、IVの1号横穴・6号横穴・8号横穴・9号横穴、V、VI
Ⅶの1節・2節、Ⅷ

佐藤達雄 IVの2号横穴・10号横穴、Ⅸの3節

6. 本書の編集は、斎藤忠顧問の指導のもとに平野・佐藤が行った。
7. 発掘調査にかかる事務は伊豆長岡町教育委員会が、資料整理及び報告書刊行までの事務は静岡県教育委員会が行った。

目 次

I はじめに.....	1
調査に至る経過.....	1
従来の調査.....	1
II 遺跡の位置及び環境.....	3
III 調査の経過.....	6
横穴群の構成について.....	6
調査の方法及び資料の取り扱いについて.....	6
調査の経過.....	8
IV 各横穴調査の概要.....	11
V 出土遺物.....	31
VI 横穴群の年代と構成について.....	39
VII 横穴群調査における2、3の問題.....	42
1. 北伊豆における横穴群の発生と分布について.....	42
2. 家形石棺について.....	44
3. 横穴掘鑿の工具について.....	50
VIII 大師山横穴群の特質.....	52
IX おわりに.....	56

插 図 目 次

第1図	位置図(伊豆横穴分布図)	5
第2図	横穴位置関係図.....	7
第3図	8号横穴墓道断面概念図.....	9
第4図	1・2号横穴周辺地形図.....	12
第5図	1号横穴実測図.....	13
第6図	夕 石棺実測図.....	15
第7図	夕 小堅穴実測図.....	16
第8図	2号横穴石棺実測図.....	18
第9図	夕 実測図.....	19
第10図	6号横穴実測図.....	21
第11図	8・9・10号横穴周辺地形図.....	22
第12図	8号横穴封鎖部分断面概念図.....	23
第13図	夕 墓道遺物出土状態図.....	24
第14図	8号横穴実測図.....	25
第15図	夕 1号棺実測図.....	27
第16図	夕 2号棺実測図.....	27
第17図	9号横穴実測図.....	27
第18図	10号横穴実測図.....	29
第19図	8号横穴出土須恵器実測図.....	30
第20図	6・8・9号横穴出土須恵器実測図.....	36
第21図	8号横穴出土土師器実測図.....	37
第22図	8号横穴出土須恵器実測図.....	38
第23図	家形石棺実測図 1	46
第24図	夕 2	47
第25図	横穴位置関係概念図.....	54

図版目次

図版第1

A : 大山横穴群遠景

B : タ

図版第2

A : 1号・2号横穴調査前の状態

B : 1号横穴調査前の状態

図版第3

1号・2号横穴調査後の状態

図版第4

1号 横穴

図版第5

1号横穴石棺(正面)

図版第6

A : 1号横穴石棺 握り込み(正面)

B : タ タ (背面)

図版第7

A : 1号横穴天井部分

B : 1号横穴石棺(側面)

図版第8

A : 1号横穴石棺・棺座

B : タ タ タ

図版第9

A : 1号横穴石棺内部

B : タ 小窓穴

図版第10

A : 2号横穴

B : 2号横穴玄室内部

図版第11

A : 2号横穴石棺

B : タ 石棺内部

図版第12

A : 3号横穴

B : タ 玄室内部

図版第13

A : 4号横穴

B : タ 玄室内部

図版第14

A : 5号横穴

B : 6号横穴

図版第15

A : 6号横穴玄室内部

B : タ 排水溝

図版第16

7・8・9・10号横穴

図版第17

A : 7号横穴

B : 7号横穴内部

図版第18

A : 8号横穴調査前の状態

B : タ 玄室内部

図版第19

A : 8号横穴1号棺

B : タ 2号棺

図版第20

A : 8号横穴封鎖石

B : タ 調査後の状態

図版第21

8号横穴遺物出土状態

図版第22

A : 8号横穴遺物出土状態

B : タ タ

図版第23

A : 9号横穴

B : 9号横穴玄室内部

図版第24

A : 9号横穴封鎖石

B : タ タ (内側より)

図版第25

A : 10号横穴

B : 10号横穴玄室内部

図版第26

出 土 遺 物

図版第27

タ

図版第28

ノミの痕跡

I はじめに

1. 調査に至る経過

静岡県教育委員会では埋蔵文化財保護の施策の一環として、現在史跡指定候補物件の調査を進めているが、昭和48年度に千人塚古墳を中心とする浜松市三方原学園内古墳群、磐田市米坂古墳群、清水市牛王堂山3号墳、沼津市江ノ浦横穴群、函南町柏谷百穴等の主として古墳群の現地調査あるいは踏査を実施した。その一連の作業として、大師山横穴群の調査も県文化財専門委員の現地調査として実施された。現地調査の結果、特異な構造を持つ横穴として古くから有名である割に実態が充分把握されていないこの横穴群の基礎的資料を整理し、保存の方法を検討する必要のある事が指摘された。それにもとづき横穴群の実測を中心とする調査計画が立案され、地元伊豆長岡町と協議の結果、静岡県教育委員会、伊豆長岡町教育委員会の共催事業として、昭和49年度に現地調査を実施することになった。

調査は県文化財専門委員斎藤忠・長田寅蔵氏の指導のもとに、県教委職員及び大正大学学生の手で実施することにし、現地の交渉及び事務的作業は伊豆長岡町教育委員会職員が、分担して行なうことになった。

昭和49年10月18日付にて伊豆長岡町教育委員会教育長名で発掘届を文化庁長官宛に提出し、11月20日から12月1日までの12日間をかけて調査を実施した。

2. 従来の調査

大師山横穴群の存在は地元では古くから知られていたようであり、鎌治窯と地元で呼ばれている横穴（2号横穴）の石棺蓋石には明暦年間の用水に関する事績が記るされている。又今回の調査においても横穴墓道部分（墓前域部分）等には一石五輪塔、近世陶器等が出土し、地域の何らかの信仰の対象となっていた事が知られる。

又古く『豆州志稿』[※]には「大師窯・鎌治窯……君沢郡北江間村堂山ノ山腹ニアリ……各石櫃ヲ置ク…共ニ里俗之千石ノ長櫃ト称スレ古墳ノ石棺ナル事明也。」としている。

『豆州志稿』にはこの他にも「昔ト此地ニ地蔵堂アリキ、堂廻シテ地蔵ノ像ヲ珍場ニ移ス佛腹ヨリ古縁起出デタリ、弘法大師經數一千巻ヲ此縁（大師山1・2号石棺=筆者注）中ニ藏ムル事ヲ記セリ、是レ大師窯ノ称起ナリヌ一説ニ云平継時其子安千代ノ為メニ佛經ヲ藏ムト」とも記してある。

この横穴が学界に最初に報告されたのは明治35年、大野強外氏によってであろう。「伊豆国横穴を観る」と題して『東京人類学会雑誌』に発表された報告によれば、北江間村小字珍場大師山高台の崖に2つの横穴があり「奥壁に接して一段高くなりてあるは」「掘り凹みたる檻であり、其の上に同様の掘り凹みある蓋を掩いて屋根形に造られたるもの」として2号横穴の説明をし、続いて「穴の中に石棺の存在せし有様で……この石棺は正しく彫り込みて製造せられたるものにて、蓋と同作であります。左右に紐掛け様のものありて、半円形の貫き孔あり、中央に窓長く配置せら

れています。」と1号横穴の説明と共に実測図と大野氏の得意なスケッチを載せている。

又「以上2個の横穴は同地方に数多くある中に特種の横穴」として2号横穴の造り付の石棺の場合は他にも例があるが、蓋についている例ではなく、又1号横穴の石棺の例は「他に見ざること」と特異なものである事を記し、1号横穴、2号横穴の年代は「左程遠く隔たりたる時代ではなかろうかと思う」と記している。文献に現われたのはこれが最初のようであるが、大野氏の報文中に坪井正五郎氏の旅行日記に伊豆の横穴について書かれている事が述べられているので、あるいは文献として現われる以前に一部ではすでに知られていたとも考えられる。明治33年に東京大学より『古墳・横穴及び同時代遺物発見地名表』が出されているが、それには紹介されていない。

統いてこの横穴を取りあげたのは高橋健自氏であり、考古学会の春の研究旅行で踏査した記録として大正14年の『考古学雑誌』に口絵説明をしている。この中で高橋氏は北江間珍場の「山腹にあり……両者殆ど相並ぶ」と2基の横穴の説明をし、「俗里に大師窓と称す」とすでにこの名で呼ばれていた事を記している。この説明が比較的まとまったものであり、古い文献で接する機会も多くないと思われる所以、多少長いカギ用いておこう。

「甲は平面圓田扇形をなし、石棺はこの地方の山骨を成せる凝灰岩の削抜式にし、中央より稍東に偏して縱位間に据えられ、その形切妻の家形なり。正面は屍体の足部に当るべき方なれば、他の例に於て屢々見る如く、背面即ち頭部に比してその幅稍狭し。蓋の上面棟の長さが側面の軒に比して長きも頗輪郭に見るところと一致して面白し。而して最珍しきは蓋と身と相接するところ、正面背面共に円形の浅き凹みを施したこと差なり。この凹所の内は前後共に後世寧ちたる孔あるは盜賊などの所為なるべく、今はこの孔より容易に内部を窺ふを得べし。蓋の原位置を変じたるはこの孔に棒を挿入して動かしたるならむ。」

石棺の正面に於て蓋と身とに跨りて方形の浅き凹みあるは大和国磯城郡多武峯村大字倉橋字赤坂にその例あれども、正背共にあるは未曾有の新例なり。次に横穴中に石棺ある場合は既ね造付にして移動可能なるに、かくの如く尋常の石棺中に於ける如く、別に造りたるを据置きたるは、今日までは確に天下一品なりとす。

乙は其平面圓甲と同じく圓扇形を成せども石棺の位置は全然之と異なり、他の地方に於て往々見る如く、奥壁に近く横にあり、其構造他の例の如く一段高き床に穴を穿ちて身となしたり。而してその上に同質の岩石にて造りたる蓋の遺存せるは最珍重すべく、蓋したる海外無比の例ならむ。この蓋も切妻形なれども、棟の長さ却て軒の長さより短し。その盖著しきに至らば遂に四柱とも見做すべきものにして、これ亦珍らしき例なり。その前方斜面に明暦の刻文あるは、この横穴のその以前既に暴露せしを知るべく、身の正面中部の毀損せるは、その以前遺物の隕難にかかりしを察すべきなり。」

以上のように説明し、やはり横穴に石棺のある事を注目し、特異な例としている。

又高橋氏は大正11年5月に出版された自著『古墳と上代文化』の中で「切妻形の石棺」又「造付石棺」の例としてこれらを紹介し、同13年6月刊行の改版のものにも紹介した。

昭和5年に編纂の始まった『静岡県史』の記載は県史の編纂を高橋健自氏が指導され、先の『考古学雑誌』の報文をほぼ要約している。

その後しばらくの間類例としてあげているものを除いて大師山横穴群について述べられたものは出されていない。その後、昭和26年に斎藤忠顧問は当時県教育委員会に勤務されていた長田実顧問とともに訪れ、実測図を作製され、遺跡の重要性を認識されたが、つづいて東京や県内に在住する多くの学者の訪問もあった。

昭和32年に入り、小野真一氏が静岡県東部の遺跡について解説を付した『静岡県東部古代文化総覧』中に「田方郡珍場横穴」として紹介しているが、前記高橋氏の報文を要約している。

同じころ、この地域の古墳群の調査の一環として輕部慈恩氏あるいは今回の調査顧問である長田実氏等も踏査を実施しており、長田氏により大師山横穴2基の解説がされた事がある。(長田実1954)

従来の文献によると、大師山横穴は石棺を持った2基のみが注目され、他のものについては述べられた事がない。これは石棺を持ったものが注目されたあまり、他のものが見落されたか、あるいは報告された時には開口していたものは2基のみで、他は未発見であったかのいずれかであろうが、調査の結果他の横穴の開口されたのも比較的古い事が解り、前者である可能性が強い。

この横穴群に前記の2基以外の横穴が存在する事か記されたのは昭和45年に実施された静岡県埋蔵文化財分布調査以後の事ではなかろうか。

昭和50年に至り山内昭二氏は『伊豆柏谷百穴』の中で北伊豆の横穴について簡単に触れ、大師山横穴群に9基の横穴が存在している事を記している。

今まで見て来たように家形石棺のある横穴の存在は古くから知られた事であり、その特異な事もすでに述べられている。しかしこの横穴群が「何基あるのか」その規模が注意され始めたのは戦後もかなり時間を経てからであり、横穴（古墳）を群として考える事がおこなわれ、その構成が問題にされるようになる時を待たねばならなかった。それは古墳時代の研究が遺物に対する興味からその時代の古墳を造り出した社会構造の究明に目を移した事、それに伴って群集する古墳の内容分析に時代解明の手懸を求める始めた事をも表している。

大師山横穴がいつ構築され、いつ頃まで使用されたのか、あるいはその横穴群の構成はどうなっているのか等についての基礎的な調査は手がつけられていなかった。今回の調査で現在知られている横穴の実測図の作成と共にそうした基礎的資料を整備する事が主たる目的にされた。

II 遺跡の位置及び環境

大師山横穴群は静岡県田方郡伊豆長岡町北江間大師山1709、1717番地に所在する。

天城山に源を発し、南伊豆高原の水を集め、半島中央部の山間を縫うように流れる狩野川が伊豆長岡町までくると山から最初の平野に出る。田方平野である。この平野に続く伊豆長岡町北江間の谷を前面にした大師山の南斜面に2群の横穴が営まれている。大北横穴群と大師山横穴群であり、谷の奥に位置しているのが大師山横穴群である。横穴は山の中腹標高ほぼ50メートルの所に位置している。

東海道線から大師山横穴群へは2つの道をたどる事ができる。1つは東海道線三島駅から伊豆箱根鉄道に乗って原木の駅で下車し、石堂橋で狩野川を渡ると岩崎の部落につく。岩崎から山裾の道

を通じて大北の部落をぬけると次が千代田の部落である。部落の東端の山腹に横穴がある。他は沼津駅から伊豆長岡町行のバスに乗って長坂で下車し、北江間の水田地帯を横切って千代田に至る道である。この道は沼津市街をぬけると海水浴場で有名な牛臥の海岸を通り、獺子浜、江ノ浦の海岸沿に走り、海岸沿の大横穴群である江ノ浦の横穴群の下を通る景色の良い道である。

大師山横穴群のある鶴頭山、大平山の山塊は板灰岩あるいは板灰角砾岩等によって成立しており、その周辺に存在する大北横穴群・江ノ浦横穴群・日守横穴群・桃源院横穴群等と同じように江ノ浦板灰岩層を掘って造られたものである。狩野川の中流域に横穴が多く、その大半が江ノ浦板灰岩層を掘って造られている事はすでに指摘されている事であり（中川・岡本1956）狩野川の東側の板灰岩の少い地帯でも柏谷百穴・宗光寺横穴等は少數の板灰岩の露頭を選んで造られている。狩野川流域の田方平野に1つの掘りをもつて成立してくるのは弥生後期に入ってからであり、右岸の山木遺跡を中心に神崎遺跡、奈古屋遺跡、平井原遺跡、向原遺跡等の多くの遺跡が、水田地帯を望む丘陵上に成立している。それらの遺跡の多くは古墳時代にまで引続いており、左岸には花の木遺跡、麻の段遺跡等が古墳時代の遺跡として始まっている。又狩野川流域の田方平野・三島平野における古墳分布の中心は狩野川流域よりも愛鷹山山麓に集中しており、古く土狩500塚の名で呼ばれる土狩古墳群を始め、沢田古墳群、井出古墳群、石川古墳群等がある。中でも沢田古墳群は5世紀末の前方後円墳である長坂古墳を擁し、有力である。それに対して田方平野を取りまく地域には有力な古墳群は少く、伊豆長岡町鈴形古墳群、大仁町宗光寺古墳群等が比較的まとまった古墳群であるが、愛鷹山山麓の古墳群に比較すればその差は著しい。それに対して1図に示すように横穴群の分布は田方平野の周辺に圧倒的に多いと言える。昭和45~47年の分布調査の結果によれば33の横穴群が確認されている。

江間の谷について見れば谷の入口に花の木遺跡・麻の段遺跡の古墳時代あるいはそれ以後の集落址があり、谷の奥の長坂に長坂遺跡がある。又大北の部落の中に円墳7基よりなる箱根山古墳群がある。学術調査が実施されていないので、内容は不明であるが、畠の耕作により露出した部分の調査によれば、円墳による横穴式石室を持った古墳であり、後期後半のものであろう。同じ谷にあるこれらの古墳群・横穴群と花の木遺跡・麻の段遺跡・長坂遺跡等との間に直接結びつかないまでも密接な関係がある事は充分考慮しなければならないであろう。

番号	名 称	所 在 地	番号	名 称	所 在 地
1	宗光寺横穴群	大仁町宗光寺	18	山の神横穴群	三島山山の神
2	洞	ク	19	一丁山	タ
3	丸山	ク	20	杉沢	タ
4	岩鼻	ク	21	十二穴	タ
5	方法院	ク	22	江ノ浦	タ
6	多聞山	ク	23	蘆山	タ
7	花坂	ク	24	守	タ
8	大師山	ク	25	江ノ浦比戸山	タ
9	大北	ク	26	多比戸山	タ
10	無	ク	27	多政	タ
11	須之上	ク	28	小南	タ
12	柏谷	ク	29	松	タ
13	沢横穴群	ク	30	海豚	タ
14	上平	ク	31	守	タ
15	竹井門	ク	32	桃源院	タ
16	赤	ク	33	木	タ
17	王	ク		大場赤王	タ



III 調査の経過

1. 横穴群の構成について

横穴は大師山から東に延びた丘陵の南斜面にあり、西から東へほぼ1列に並んでいる。西端が地元で大師窟と呼ばれ、家形石棺のある事で古くから知られている横穴であり、その東端が銀治窟と呼ばれているやはり石棺を持った横穴である。西側から東へ順に番号を付ける事にし、10号までの横穴を確認した。横穴の位置する高さは標高50m程度であり、西側がやや高く、東側に位置するものがやや低い傾向があるが、ほぼ同じ高さを考えて良い。周囲に連続して横穴の存在する可能性があるので、作業の間を見てボーリング棒を使用して、確認のための調査を実施した。所々に深く入る所があり、横穴の存在を思わせる所もあったが、基盤である凝灰岩の凹凸であり、横穴と確認するに至った所はなかった。

しかし横穴の調査に平行してのものであり、充分探査をし得たとは言えないでの、今回確認し得たもの以外の横穴の有無については、存在する可能性が少いとするに止めよう。

ほぼ1列に並んだ10基の横穴は位置的関係より2~3群に分け得るだろう。すなわち、西側の少し高い所に位置する1号・2号及びその東側で少し低い所にある3~6号と7~10号の4基の2群、あるいは1~2号と3~6号とを更に分けて3群と考える事ができる。この問題については後にもう少し触れてみよう。

2. 調査の方法及び資料の取り扱いについて

確認された横穴は全て開口しているが、墓前域・墓道にあたる部分が埋没している事が考えられるので、横穴内の実測と墓前域・墓道部分の発掘を計画した。

* 横穴の封頭部より外側の施設については前庭部・前庭・墓道等呼び方が一致していない。本書では斎藤編著により「墓前城」を使用した。この言葉はすでに坂詣秀一氏が使用されているが、厳密な概念規定がなされている言葉ではない。

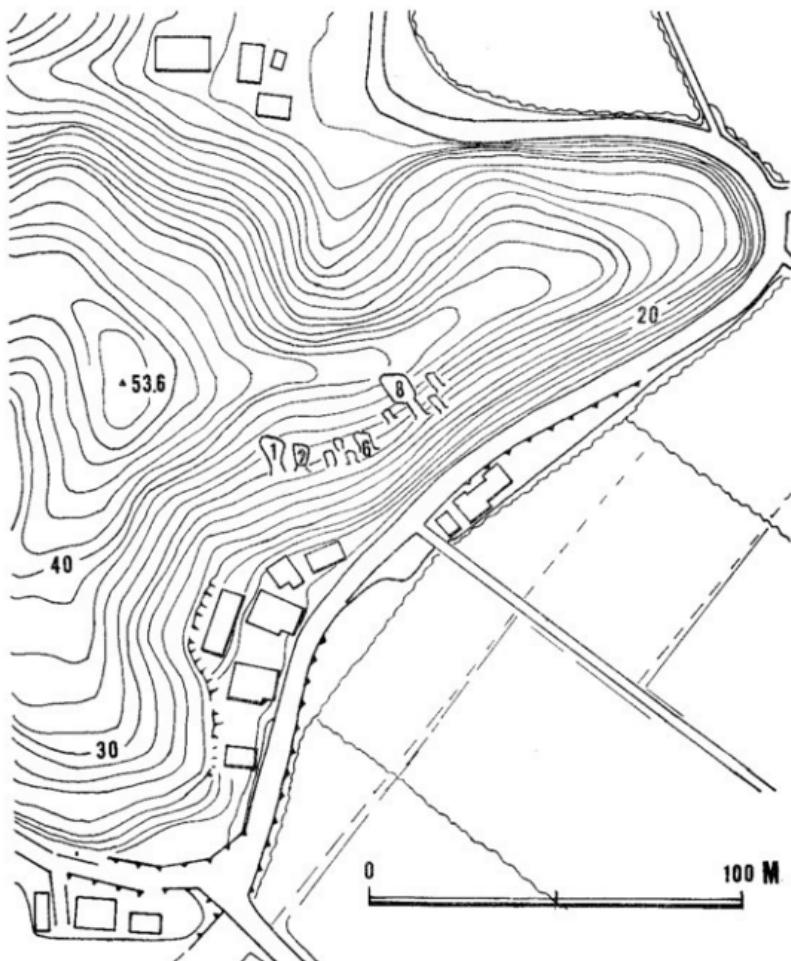
調査の対象とした横穴は石棺をもつ1号、2号、8号とすでに遺物が採集されており、年代等の予測についている6号及び8号に近接している9号・10号の6基であり、横穴の実測図を作成することを中心にして、併せて横穴間の位置関係を明確にするため、地形測量図を作ること、及び横穴の墓前域・墓道部分から遺物が採集されており、横穴の年代等を把握できる可能性があるので、その部分の発掘を実施することにした。調査を開始する前に対象となる横穴の現況写真を撮影することにし、草の生えたままの現況写真と、草刈り後の2通りを撮ることにした。玄室内は自然の光線のみでは写真撮影が不可能であり、又作業もできないので、動力発電機を用意し、電燈を灯して作業をすることにした。写真は中型カメラと小型カメラ2台を使用し、全て白黒のフィルムを使用した。又調査状況の説明ができるようにスライドを作成し、2組のプリントを作って、町教委と県教委と1組づつ保管することにした。

横穴内の実測図は全て1/100の縮尺で実測し、横穴の位置関係図は1/50の縮尺で作成した。各横穴実

測の水準は仮の標高点を設定し、それからの高低で現わした。仮の標高点が海拔何メートルにあたるかは調査時間の関係で正確に計り得なかった。今後の作業として残している。

出土した遺物は全て水洗・記名(ITA-8-)し、復元可能なものは最小限復元し、写真撮影した。又土師器等保存処理の必要なものはパインダー18を表面に塗布した。さらに鉄器片については真空含浸装置により合成樹脂エマルジョンを含浸させる方法により保存処理中である。

なお現地調査および出土遺物の図面・写真ネガフィルム等は全て県教委文化財室に保管してあり、



第2図 横穴位置関係図

出土遺物は全て伊豆長岡町郷土館に保管してある。これらのうち展示にたえるもの一部は同郷土館に展示の予定である。又同時に出土した近世陶器等横穴と直接関係のない資料は一部復元をしたが大半は水洗・記入をしたのみで、それ以上の整理は実施していない。

3. 調査の経過

調査の経過を日誌を追いながら簡単に記すことにしよう。

11月20日

伊豆長岡町役場にて調査について事務的な打合せの後、すでに運搬してあった発掘器材を点検し、不足分を補充すると共に、現地に運びこんだ。現地は急な山の傾斜をかなり登った所であり、登り口にはかつてこの地域の青年団の人々によって作られた石段が残っているが他は細い山道である。調査時の往来に支障がないよう草・笹の刈り取りがすでにおこなわれていた。横穴は全て開口しており、10基が確認された。從来大師窟と呼ばれている左端の横穴を1号としそれから右へ2~10号と順に横穴に番号を付した。

11月21日

午前中調査予定区域の草刈りを実施するのに並行して、各横穴の調査前の状態を撮影した。午後1号・2号及びその前庭部と思われる部分の地形測量を実施し、続いて1号横穴の清掃作業を実施した。横穴は完全に開口しており、多くの人々が出入りしていたようで、玄室内は多少の土とホコリを掃き出す程度の作業ですんだ。この横穴は古くから知られている家形石棺があるが、多くの人々が手をかけており、蓋と身が多少づれており、又全ての角の部分は破損している。従って正確な計測は多少無理があるかも知れないが、一応復元した形で実測図を作る事にした。又玄室の奥右隅にはほぼ正方形の平面形を持つ小堅穴がある。小堅穴の口の部分は周囲を1段低く作っているが恐らく蓋をつけるためのものであろう。遺物は皆無である。夜宿舎において斎藤・長田両顧問及び県教委事務局の池谷主査を混え、今後の調査の方法等について打合せをおこない、横穴の実測図の作成に最も重点をおいて作業を進めることにした。又從来参場横穴あるいは江間の横穴、千代田横穴等呼び方に多少混乱の見える横穴の呼び方を斎藤顧問の提唱により、所在地の小字名をとって大師山横穴と呼ぶ事にした。

11月22日

1号横穴は先日までにほぼ清掃を完了したので、写真撮影をおこなうと共に、実測図を作るため基線を張る準備を始めた。それに平行して2号横穴の清掃を始めたが、墓前域部分にかなりの土が堆積しており、その部分の発掘及び埋土の除去が必要である。発掘開始後間もなく一石五輪塔の破片、近世陶器片等が出土している。

11月23日

1号横穴の実測を開始する。大型の横穴であり、内部で脚立を立てての作業である。横穴の壁面に剥落が多く、測点を選ぶのにかなり苦労する。

2号横穴は昨日に続いて墓前域の発掘を続ける。やはり近世の陶器あるいは古鉢等が発見されている。基盤の岩盤は南になるに従いかなり下っており、山の自然の傾斜に連っている。従って横穴

構築時には墓前域と呼べる程のものは、作られていなかった事が予想される。又地元の人々の話でも、かつて「青年団がこれらの横穴（大師窟・鍛冶窟）の顕彰のために桟の木を植えた時に整地した」との事であり、この部分は整地によるものである事がたしかめられた。従って、平坦になっている部分と傾斜に入る所の境までの範囲で発掘を終える事にした。近世陶器の破片がかなりの量出土したが、これらは大師窟・鍛冶窟として信仰の対象にしていた事、あるいは2号横穴の石棺蓋石に彫刻文字のあるように、記念碑的性格を持っていたために、供物として置かれたものであろう。

11月24日

1号横穴は玄室の実測がほぼ終了したので、石棺の実測にかかる。石棺は発見以来多くの人々の手に触れており、盜掘によって、蓋と身の境に穴があけられており、石材がやわらかな凝灰岩という事もあって、全ての角が破損しており、正確な計測がかなり困難であった。『静岡県史』の記載のように、身は前側に比較して奥側が広く、又蓋は軒に対して棟の長さが長いと言う事は傾向としては考えられるが、先に述べた事情により、明確になし得なかった。しかし石棺の身の幅は中

央部より両端になって多少狭くなる傾向がある。調査員の1名が迷路のため静岡に帰ったので、2号横穴の調査は中止し、8号横穴の清掃、発掘の準備にかかる。発掘前の写真撮影の後、墓道の部分が大半埋没しているので、その部分の発掘作業に入る。夕方になって遺物が出土し始めるが、古墳時代の遺物の上に赤堀底の土師器が出土しており、この横穴が後世埋葬施設として再利用されている可能性を思わせた。横穴のみならず、こうした例は古墳にもある事であるが、特に中世の埋葬施設として後世再利用されている例が最近かなり発見されている。

11月25日

2号横穴の清掃・墓前域の調査を再開し、午前中ではほぼ完了する。午後写真撮影のうち実測の準備にかかる。

8号横穴の墓道の調査を継続し遺物の検出をおこなう。当初の予想よりも多くの遺物が出土しているので、時間が多少かかっている。墓道の調査に平行して、玄室の清掃にかかる。

11月26日

2号横穴の実測を始めることと平行して、前日に続いて8号横穴墓道の清掃をおこない夕方まではほぼ完了する。墓道の中央部分に排水溝と思われる幅20cm程の溝が作られている。出土した遺物は大半が須恵器であり、墓道の中央部左側に寄った所から出土している。又鉄器の小破片が2枚程出土しているが、高い位置から出土しているので、埋葬時の位置を保っているのではなく、盜掘された時、玄室内から運び出されたものであろう。又人頭大の河原石による封鎖石の最下部が残っている。

11月27日

2号横穴の実測と8号横穴の写真撮影をおこなう。これに平行して最近玄室内に溜った雨水の排



第3図

水用の溝を掘ったところ、遺物が採集されている6号横穴の清掃及び発掘をおこなう。夕方までに排水をほぼ完了する。午後から10号横穴の清掃をはじめたが、8号横穴の墓道部分に近いためか天井が低く、横断面も他の横穴のように「蒲鉾」型をなさず、側壁と天井部分の境が明瞭になっている。壁面のノミの痕は幅の狭いもので鋭く彫り込んでいる。墓道部分が埋っているので、その部分の排水作業を実施する。最も傾斜の低い位置にあるので、墓道の長さは2mに満たないものである事がわかった。

11月28日

8号横穴の実測を始める。これに併せて10号横穴の調査を進め夕方までにはほぼ完了する。6号横穴の清掃を昨日に統いて実施し、午後から実測にかかる。午後から9号横穴の排水にかかる。墓道部分の排水を大半終り、封鎖部分を検出する。

11月29日

8号横穴封鎖部分の実測および発掘をおこなう。封鎖石の上から須恵器の杯が出土している。又封鎖石を除去したところ、封鎖石の下から須恵器が出土しており、追葬のあった事が考えられる。しかし出土した須恵器には時間差はあまりないようである。

9号横穴は奥行の短かい横穴である。封鎖部分は、下の段に大型の風化した砂岩を使用しており、その上に小型の角ばった炭灰岩を使用している部分との二つがあり、やはり追葬の可能性がある。

11月30日

8号横穴・6号横穴等の実測図の不足部分を補削し、3～6号横穴・7～10号横穴の位縦関係図を作成する。

9号横穴の封鎖部分の調査中封鎖石の下から須恵器が出土しており、昨日考えた追葬のおこなわれている可能性を証拠付けた。しかし、墓道部分から出土した須恵器と、封鎖部分の下から出土した須恵器の間にやはり時間差はないようである。夕方遅く機材を整理し、11日間にわたった現地の調査を終了した。



大野賀外「伊豆國横穴を覗る」による

IV 各横穴調査の概要

1号横穴

1号横穴は大師山横穴群の右端にあり、2号横穴に近接しているがこれより少し高い所に位置している。古くから開口しており、大野賀外・高橋健自両氏を始め何人かによって紹介された事のある横穴であり、地元では大師窟の名で呼ばれている。玄門部分は落盤・崩壊等により失なわれており、計測不能の部分もあった。又当然ながら封鎖石等は全く遺存していない。しかし墓前域に横たわる大きな石材には、これに使用されたのではないかと思われるものもある。

大型の横穴であり、平面形は玄室と羨道部の区別がなく、玄門部分が狭く、奥が広くなり、長軸を縦に取った長方形型の変形したものが、扇形に近い形をしている。玄室の奥行6.2m、幅は奥壁に近いところで3.55m、玄門に近い部分で推定2.40mである。天井までの高さは奥壁から1.5m程度のところが最も高く2.85mであり、そこから玄門に向けて少しづつ低くなっている。玄門に近い部分で1.9mである。横断面は蒲鉾状を呈している。

玄室の中央部の右側に縦位置で切妻形の屋根をもつた石棺がある。石棺を据える位置に石棺の長さ・幅より5cm～10cm程大きく長方形の掘り込みをし、底面を平坦にしている。深さは奥壁寄りに15cm、入口に近い所ではほとんど深さはない。横穴の玄室床面が奥壁から玄門に向って多少傾斜しているので、石棺を据えるについて、平坦面を作るためのものであろう。

玄室の側壁は崩れている部分があり、不明瞭な所もあるが、壁面はていねいに削ってある。玄室の奥壁に沿った左隅に40cm×50cm程の落円形の小竪穴が掘られている。(第7図)。深さは40cm程であり、底面はほぼ平であるが、穴の中央部に径20cm程の円形にさらに深く掘られている。又穴の縁は10cm程の幅に、深さ10cm程削り取り平坦部分を作り出している。恐らく板石か何か判然としないが蓋をつけたものであろう。この小竪穴は掘削が横穴を掘ったのと同じようなノミでおこなわれている事等により、後世に作られたとするよりも、この横穴に直接関係する何らかの施設と考えて良いであろう。大仁町宗光寺横穴内に火葬骨を入れた石棺があった事等を考慮すれば、そうしたものに近く、火葬骨の埋納施設と考え事ができるかもしれない。

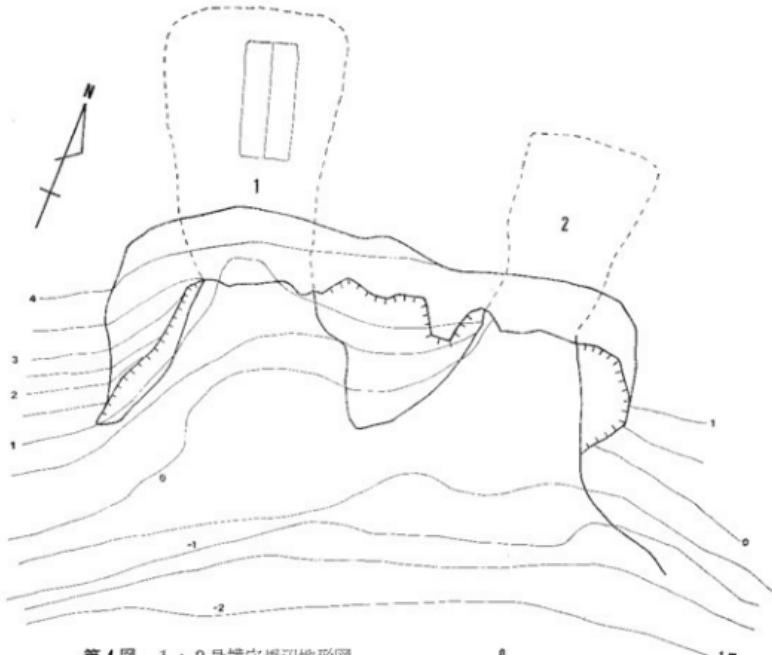
横穴内の家形石棺についてはすでに述べたように大野賀外・高橋健自の両氏により詳細に説明されており、ほほそれに尽ると思われるが、多少の重複をいとわず今回の調査による観察を記してみよう。

大野・高橋両氏により発表されたスケッチ・写真によると、石棺の蓋は右側にズレており、石棺の内側も実測可能な所があったようであるが、今回の調査時には左側にズレており、又昭和26年11月になされた斎藤顧問の実測図も同じであり、これ以前に何者かによって動かされている。現状のままでは内側の実測は不可能であるので、実測のできるように我々も蓋を動かそうと努力したが重すぎて動かず、石棺内部の計測はできなかった。開口して以来、これだけの大石を動かす程の盗掘・いたずらがおこなわれており、それに伴って横穴内も一部は掘り下げられる等、荒されている部分もあった。

石棺は凝灰岩の削り抜式の石棺であり、玄室の中央部分より少し右側（東側）に寄った所に縱位置におかれている。使用石材がやはらかな凝灰岩であるうえに先にも述べたように多くの人々がつづいたため石棺の角は欠け細い計測に堪えない部分があるが、一応復元した状態を急頭において実測した。

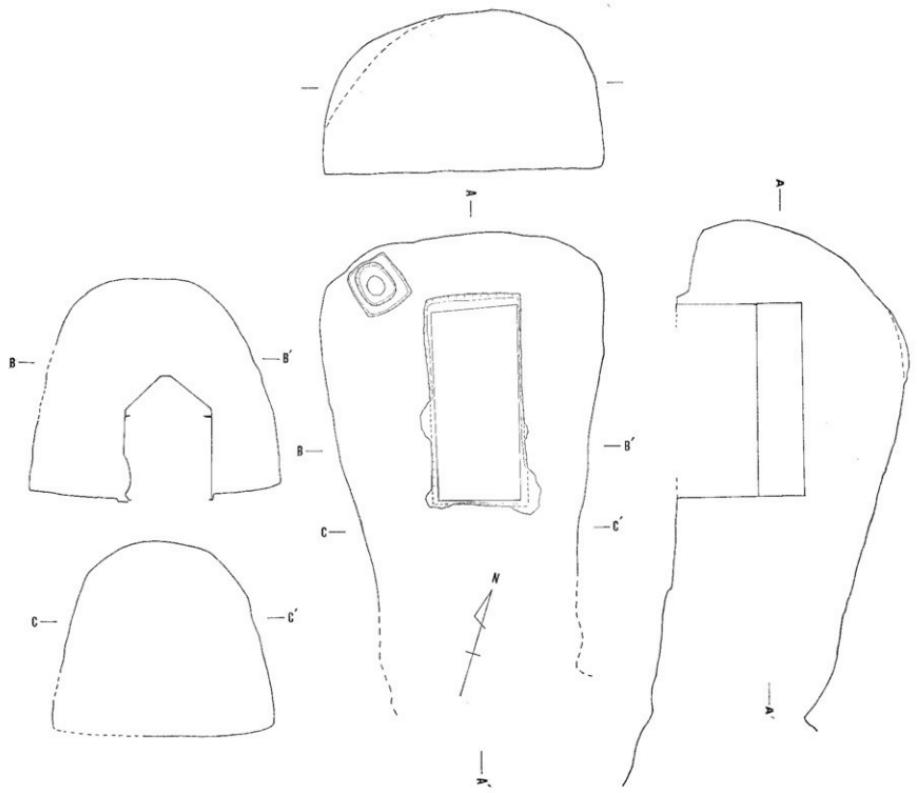
石棺身の平面は奥側が110cm程、入口に近い側は104cm程であり、又長さは240cm程である。高橋健白氏の指摘したとおり、奥側がやや広くなっているようであるが、さらに細かく観察すれば、石棺の側面は中央部に比較し両端ともに多少縮む傾向にあり、傾斜は共に棺の側端から30~40cm程の所から始まる。従ってそこには浅い筋が観察できる。身の高さは100cm程であり、その中を削り抜いているが、その深さは蓋の位置により、正確に計り得なかつたが、ほぼ43cm程である。ちなみに高橋健白氏による計測では1.6尺(48.5cm)である。又石棺身の平面形を見ると両妻にあたる壁が平行でない。従って正確に長方形でなく多少いびつに見える。石棺製作時の誤差であろう。

石棺蓋は切妻形をしており、蓋頂部は平坦面をもたず、棟にあたる棟が1本通っている。高さは54cmであり、幅は左右にそれぞれ50cmである。屋根にあたる斜面はそれぞれ77cmである。石棺身とほぼ同じ大きさであり、身と合う所は垂直に8cm程切り落している。妻の部分の中心で、蓋と身と合う部分が径46cm程の円形に掘り込んである。この掘り込んである部分がどのような機能を持つか

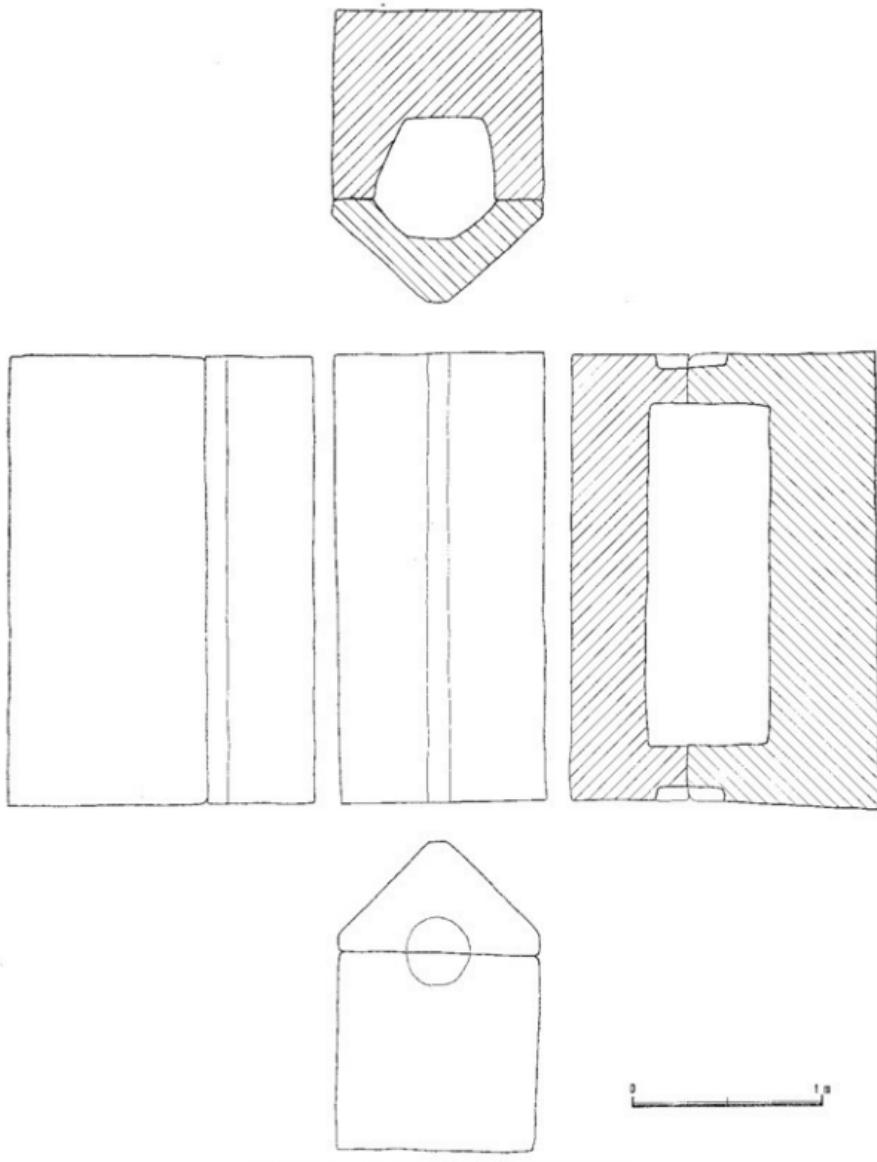


第4図 1・2号横穴周辺地形図





第5圖 1号横穴実測図



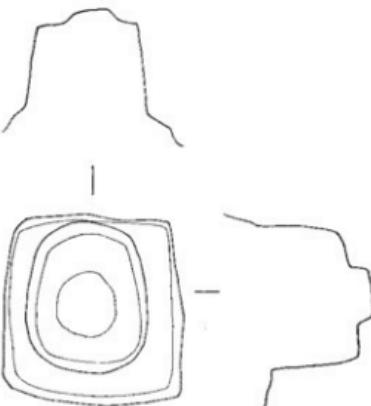
第6図 1号横穴石棺実測図

についてはうまくわからない。家形石棺に良くある縦懸突起を象徴的に表したものであろうか。他にそうした類例を知らない。いつおこなわれたのか不明であるが、石棺の身が薄くなっているこの部分を打ち破って、中の遺物を盗掘しているようである。この穴から棺の内部を見たのが図版第9・Aである。石棺蓋の内側も掘り込んであり、蓋頂部内側に平坦部を作り継が2本通っている。

この横穴から直接年代を示すような遺物は全く出土しなかった。従ってこの横穴の年代を知る手懸は納められている家形石棺を、他の古墳出土のものと対比してその年代を検討することによって得ることができよう。

家形石棺は全般的にかなりの例が報告されており、畿内あるいは九州の石棺については小林行雄氏によりその発生・編年・終末等について検討されている（小林1951）。山陰のものについては山本清氏によって検討されている。（山本1960）。しかし家形石棺は「その発達に各地域の地域的性格を考慮に入れる必要があり」（斎藤1962）たとえば出土例の多い畿内の家形石棺では蓋頂部の狭いものが古い傾向にあり、又縦懸突起のないものは新しいのが一般的であるので本例は直接それと比較する事が困難であるし、又蓋頂平坦部の狭い家形石棺は九州に類例があるが、周囲が斜面で終らず、水平の縁を飾らしている事等相違が多く、直ちに対比する事は困難であろう。したがって、まずこの地域の石棺の類例にあたって見る必要がある。駿河東部から伊豆にかけて家形石棺を出土している古墳は現在知られているところでは、大師山横穴例も含め8例である。他にさらに3例あると言われるがはっきりしない。このうち出土遺物等により年代の知られているものは長坂町下土狩西1号墳（小野1965）及び大仁町平石4号墳（小野・蔽下1973）の2例である。中でも下土狩西1号墳出土の石棺は、実測図は棺身の部分しか公表されていないが、写真によれば、切妻形の棺蓋を持ち大きさも大師山横穴出土のものと良く似ている。銀装の大刀、木心の漆器等優れた遺物を数多く出土しており、7世紀前半に鑄造され8世紀までに及んだと考えられている。又平石4号墳の例も石棺の形は異なるが、出土遺物から年代はやはり7世紀中葉と考えられているようである。従って大師山1号横穴の石棺の年代もほぼその時期に含めたと思う。横穴の年代もほぼそれに求める事ができるであろうが、さらに伊豆の横穴群の発生と合せて検討することにしよう。

玄室奥壁寄の小堅穴は出土遺物もなく年代の推定も難しいが、強いて考えれば、1号横穴の最後の追葬としてこの小堅穴が作られたと考えて良いだろう。この堅穴を先に考えたように火葬骨を埋納したものとすれば、その時期は横穴群使用の最後の時期を示すものと考えて良いであろう。



第7図 1号横穴内小堅穴実測図

2号横穴

1号横穴の東側、1号と墓前域を共有し若干低い位置に開口している。1号（大師窟）とともに古くから知られており銀治窩の名で呼ばれている。玄門及び玄室前半部分は、落盤・崩壊等により失われている部分が多くその状態は1号よりも悪い。

平面形は玄室と通道部の区別がなく、玄門部分が狭く奥が広くなる羽子板形をなし、奥行4.5m、幅は最大3.05m、玄門部で推定1.8mである。高さは奥壁から1.7m程のところが最も高く2.30mであり、そこから玄門にむかってすこしづつ低くなり、玄門に近い部分で約2m、断面鶴鉢形である。玄室の側壁は崩壊している部分があり不明瞭な所もあるが、1号と同様ていねいに削られている。天井はそれに較べて荒らく造られ、ノミのあとが明瞭に認められる。

玄室奥半は奥壁より1.80m程のところから約60cmの高さに段がつくられており、横位置に棺の身が掘り込まれ、切妻形の屋根形の蓋がかけられている。棺の内法は長さ177cm、幅60cm、深さ54cm。蓋は切妻形の屋根形で長さ220cm、幅95cm、高さ60cm、幅23cmの蓋頂平坦部から両側に約50°～60°で斜面を形成している。ただ直線的ではなく若干中央部分でふくらみ丸味を帯びている。内側は棺身にあわせて長さ165cm、幅47cm、高さ20cmで密蝶形に掘り込まれている。外側横には、向かって左側に径17cm、深さ5cm、右側に径25cm、深さ9cmの円形の掘り込みがそれぞれ1つづつ認められ

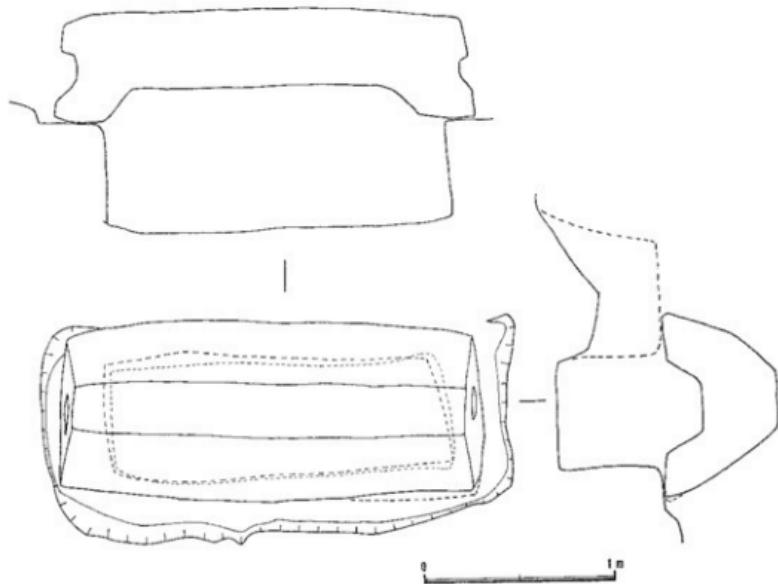


大財賦外「伊豆横穴を観る」より

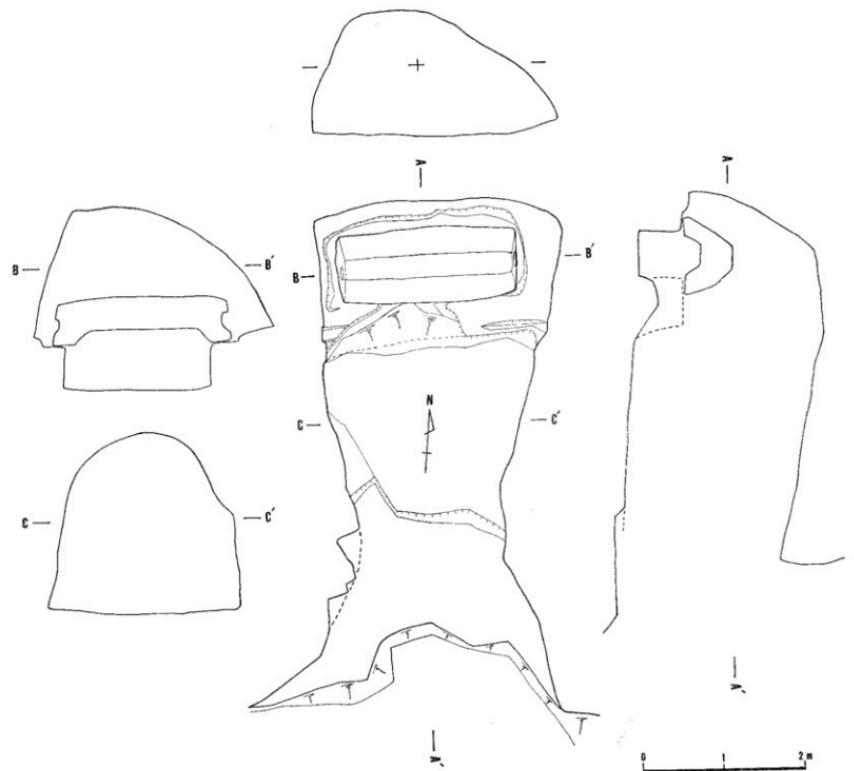
る。1号横穴と同様縦懸突起を象徴的に表わしたものであろうか。棺身の周辺は幅約20cm～30cmで約5cmほどの段がつくられ、そこに蓋がおさまるようつくられている。棺台の前面は大きく破壊され穴があけられているが、これは盗掘のためのものと考えられる。高橋・大野氏の調査時にもこれが認められるのでそれ以前の盗掘である。蓋も高橋氏の実測図と比べると若干前に移動しており、1号と同様大きな力が加えられたものと思われる。

玄室前半部及び墓前域の流入土中よりかなりの量の土器片が出土したが、いずれも中世以降のものであり、横穴の年代を知る手がかりとなるものは認められなかった。横穴の形態から編年については赤星直忠氏の研究があるが（赤星1959）、氏の様式変遷系列図にあてはめてみると木横穴はドーム型J-5様式にあたり最も退化した形態であり最終末に位置づけられている。石棺（蓋）の形態については後に検討するが、蓋頂平坦部が幅28cmとかなり広く全体の約1/4に近いこと、両側面に円形の掘り込みが認められること等は特徴的であり周辺の石棺には認められないところである。この横穴の年代についてはさらに検討を要するところである。

また蓋の前面には、江戸時代になってからの新田開発のいきさつが刻みこまれている。江戸初期のこの地域の状況を知るに面白い資料とおもわれる所以、参考までにその文面を記しておきたい。
「石井清兵衛當地田畔從往昔就半損以貌公廟明暦元乙未年二月構狩野川流水者也。」



第8図 2号横穴石棺実測図

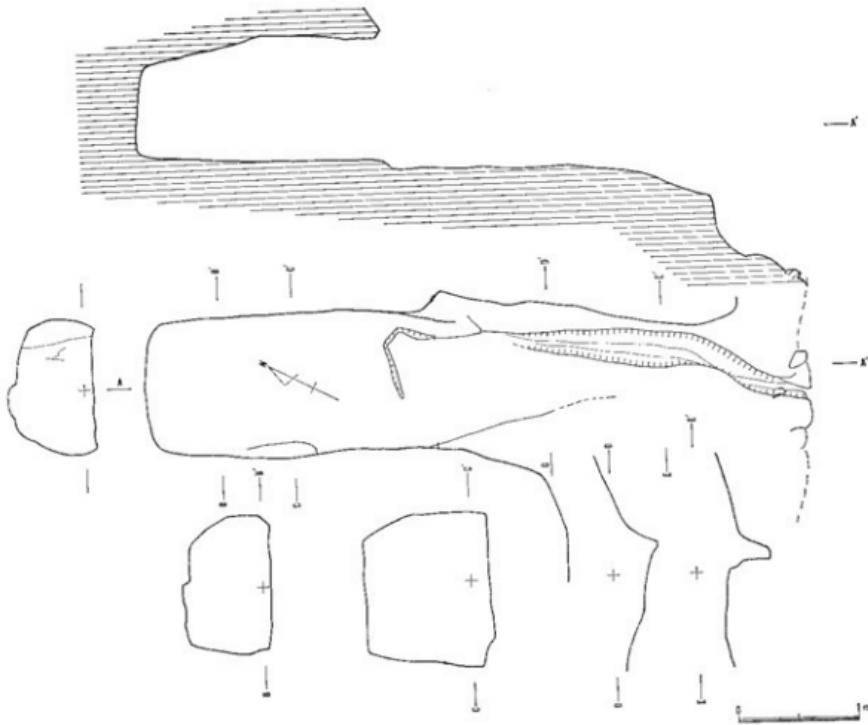


第9図 2号横穴実測図

6号横穴

6号横穴は5号横穴の右側（東側）で、ほぼ同じ高さに位置している。6号横穴と7号横穴の間は細く観察すると、基盤の岩が高くなっている。6号横穴と7号横穴以下とは位置的に別なグループと考える事のできる形をしている。この横穴の墓前域からは、かつて伊豆長岡町教委の手で須恵器の环が採集されている（20図25）。横穴の前に幅2m程の平坦部を持っており、それは3号横穴・5号横穴と共有しているので、小規模ではあるが墓前域を作っているものと考えられる。その中で6号横穴より須恵器が出土している事により、時期の推定のできるこの横穴を調査する事にしたのである。玄室と羨道の区別がなく、玄室の幅は1.2m、長さは2m程であり、ほぼ長方形の平面形をもっている。封鎖石ではなく、玄室と墓前域の境がはっきりしないので、天井部の終る所までを、玄室と考え計測をおこなった。

玄室の断面は中央部（C-C'）では天井までの高さが1.1mとほぼ正方形に近くなっているが、奥壁に近くなるに従って、少しづつ低くなっている。玄室から墓前域をぬけて巾30cm、深さ30cm程

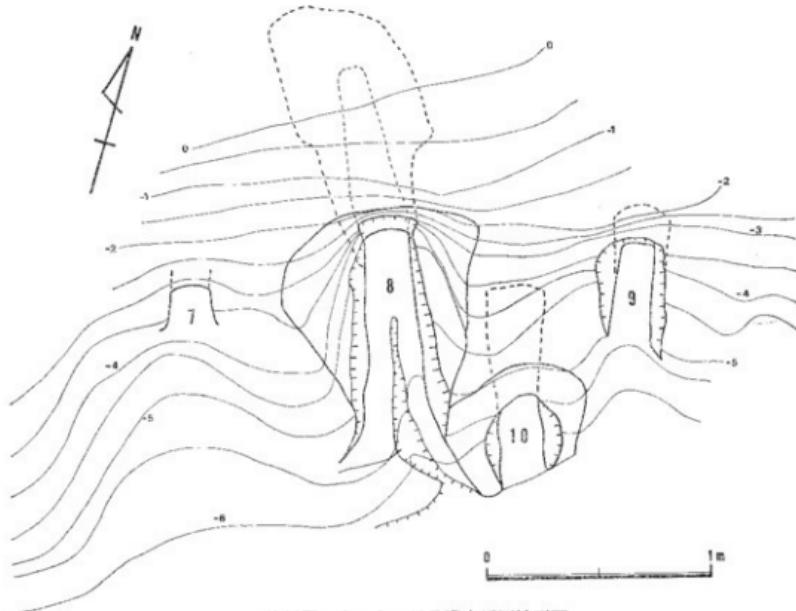


第10図 6号横穴実測図

の排水溝ができている。墓前域は先にも述べたように幅2m程であり、それから先は自然傾斜に入り急に落ち込んでいる。左側（5号横穴寄り）には墓前域は続くが、右側は6号横穴で終り、山の傾斜面になり高くなっている。從って3号・4号・5号横穴と同じ墓前域を共有したグループの横穴である事を知ることができる。3号～5号横穴も既に開口しており、玄室内部を見る事ができるが、形態的にも、規模的にも良く似ている。又調査した9号、10号横穴もほぼ同じような規模を持ったものである。この横穴の時期は墓前域から出土した資料により須恵器編年第V期（奈良時代）である事を知る事ができる。

8号横穴

8号横穴は墓道の大半が埋っていたが、玄室の入口は開口しており、身体をかがめて中に入る事ができた。玄室内には土砂の堆積が少く、天井が高く広い横穴であるが、高く広い格台がとりつけられている。内部はすでに盗掘されており、遺物は全く発見されなかった。調査はまず埋っている墓道の部分の発掘、排土作業から始めた。流入した表土を除却したところ、調査の経過にも述べたように、糸切底を持つ土師器の杯（21図7）が出土している。同様のものは封鎖部分の内側にも何個体か出土した。さらにその下層、墓道の底面に密着して、30個体程の須恵器・土師器が出土した。封鎖石の近く、墓道の中央部分、先端に近い部分の3ヶ所にまとまって出土している。須恵器



第11図 8・9・10号横穴周辺地形図

は片及び大形甕が破碎されていた他は比較的原形を保っていたものが多いが、土師器は完全に破碎されている。しかし整理の過程で大半が復元でき、埋葬時に人為的に破碎したものではないようである。出土状態は13図に示したとおりであり、墓道の中央部分、玄室に向って左側に近い所に須恵器甕、盤、長頸壺、四耳壺、平瓶、大甕等がまとめて出土し、封鎖部分にも須恵器、土師器甕が出土している。さらに墓道の先端に近いところに大甕が破碎された状態で出土したが、破片がだいぶ散っており、一部は10号横穴の先端からも出土する状態で採集し得たが破片が不足し、この大甕は復元できなかった。

墓道の幅は封鎖石のところで1mであり、外にゆくに従い多少広がり、4m程のところでは1.5mになる。又玄門より5.5m程で自然の傾斜になり、消滅する。又墓道の中央部分に封鎖石から1.5m程のところから底部で幅20cm、深さ30cm程の溝が掘られ、長さ4m程続き自然の傾斜に入りて消滅している。墓道と玄室との境に封鎖石の最下部が1部分残存していた。封鎖石は風化した砂岩の礫を使っており、その上に須恵器片が多少出土した。封鎖の様を外したところ、下から須恵器の甕の破片が出土し、追跡がおこなわれた可能性を示した。しかし封鎖部分から出土したものと、下から出土した須恵器との間に時間的差はないようである。玄門部分の側壁に幅25cm、深さ5~10cm程の切り込みがあり、玄室の入口に蓋を付けたかとも考えられたが、この切り込みのノミ痕を観察すると幅の狭い、先の尖ったものを使用しており、玄室を掘る時に使用した幅の広い先の丸いノミとは異なるのでここでは横穴の構築時のものでなく、後世この横穴を利用した時のものと考えておこう。

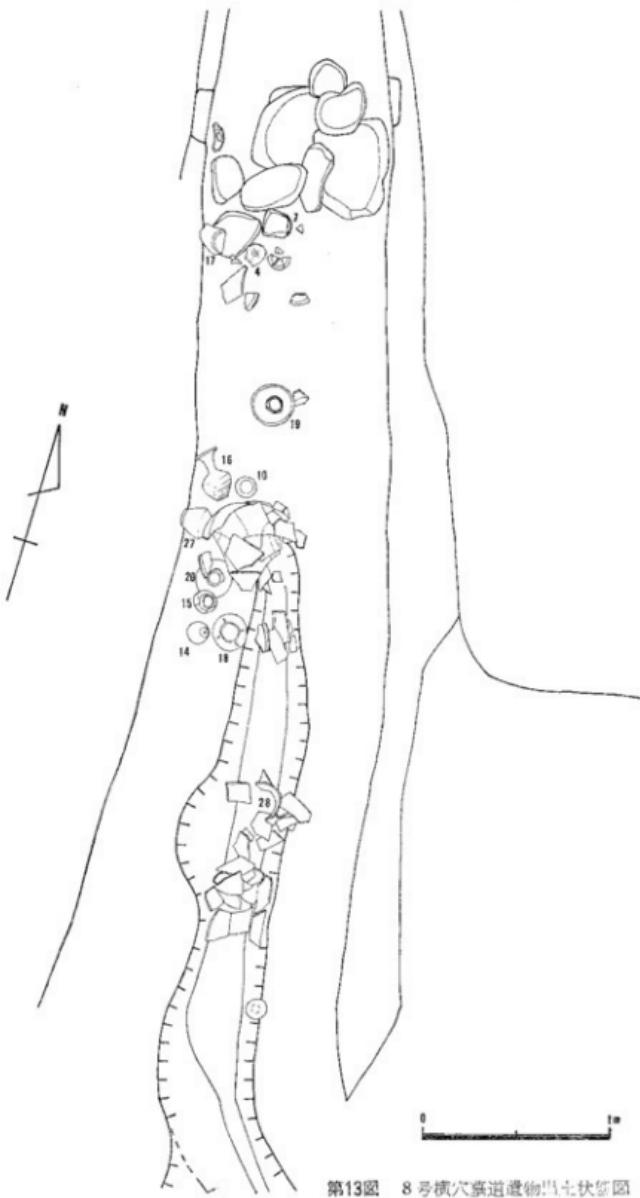
玄室と墓道の区別はなく、封鎖石から直接玄室になり、又玄室の平面形も全体的には細長い袋状を呈すが、部分的には不整形である。玄室の中央部分は封鎖部分で幅1m、奥壁に最も近い部分で幅50cm、奥行が封鎖石から3m程の間が長方形に墓道部分とほぼ同じ高さで続いており、その正面及び左右両側に高さ90cm程の段台がつくられている。段台上に左右1列づつほぼ同じ大きさの棺身が置かれている。

棺身は玄室奥に向って左側のものを1号、右側のものを2号と名付けた。1号棺は玄室の左奥にあり、最も奥の部分では玄室の奥壁に接している。玄室の左側壁は棺の部分だけが広げられた形になっている。棺身は幅50cm、長さ180cmの長方形を呈し、棺の前後で幅の縮はない。深さは50cm程であり、ほぼ箱形である。造りは比較的丁寧でノミ痕も細くつけられている。石棺の縁に幅10cm程の平坦部分が作られており、おそらく蓋を置いたものと思われる。蓋の形は2号横穴の如き窓形を成すものか、あるいは板状を成すかについては不明であるが、石棺の深さ等から考えて、板状の石を置いた可能性が強いと思われる。2号棺は玄室の右側入口に近い部分に造られており、側壁の部分は玄室の右側が少し広げられた形になっている。又奥壁に近い部分は石棺が入る部分だけが広げられたようになっており、この部分の掘り込みは非常に荒く、床面及び壁面の凹凸がねげしい。又床面

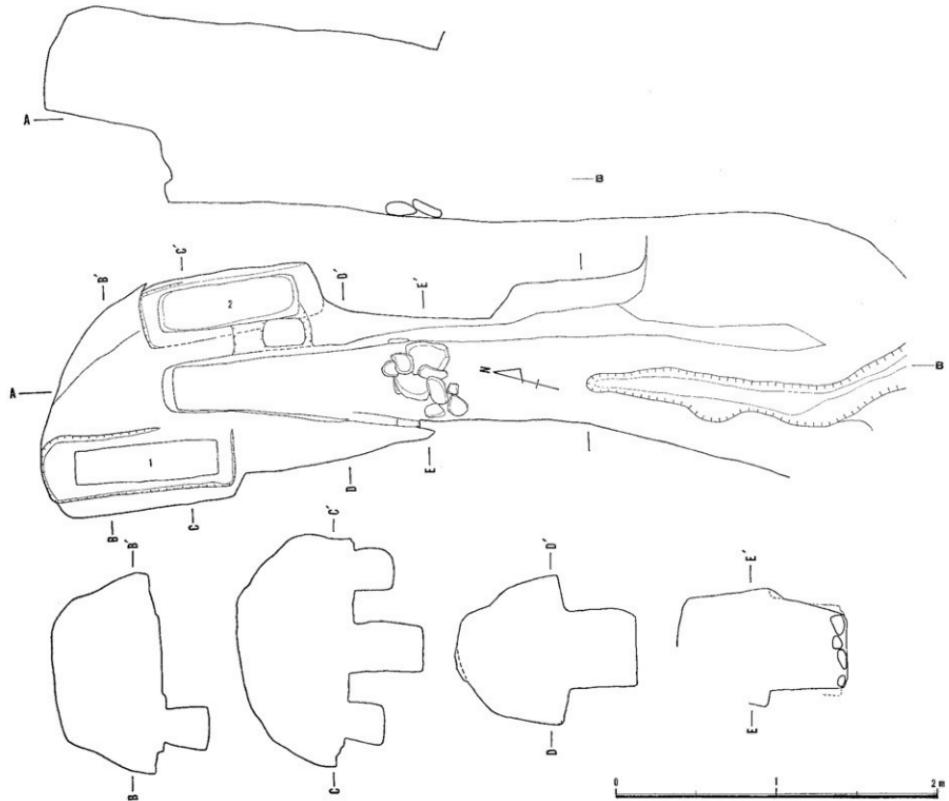
8号横封鎖部分
断面概念図



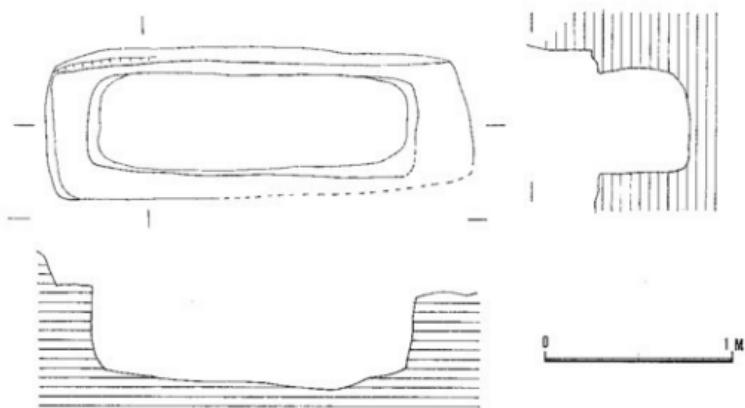
第12図



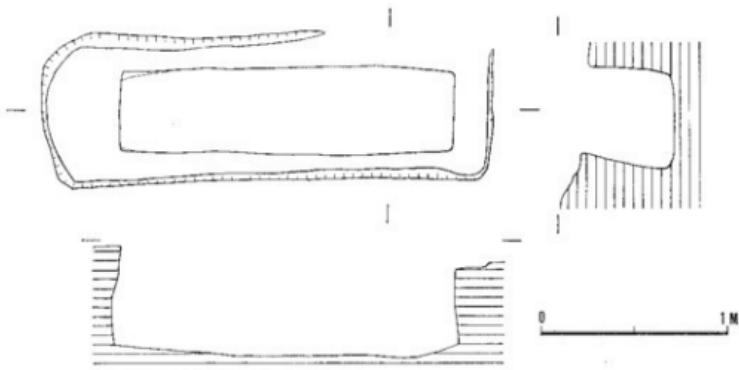
第13圖 8號橫穴墓道遺物出土示意圖



第14図 8号横穴素測図



第15図 8号横穴1号棺実測図



第16図 8号横穴2号棺実測図

は傾斜をもったまま側壁に続いている。石棺は幅50cm、長さ180cm程の長方形を程しており、やはりその中には変化はない。深さ50cm程であり、床面はほぼ平坦に作られているようであるが、両端が多少浅くなっている。1号棺と同じように、縁の部分に幅10cm程の平坦な部分を作っており蓋をしたものと思われる。全体に1号棺より作りは雑である。この棺身は破損が大きく、入口に近い部分がえぐりとられている。2つの棺の作られた順序については明らかにするものはないが、2号棺の造りが1号棺に比較して雑である事、又石棺の周囲の掘り方が雑であること等により、2号棺がより新らしい可能性がある。しかしいずれにせよ、玄室内の形態から見て2つの石棺を入れる事は始めから意識されていたことと思われる。

この横穴の年代は墓道から出土した遺物により検討すると、最も古い年代を示すのは19図11に示した須恵器の杯であるが、これは墓道の床面よりかなり高い位置から出土しており、埋葬時の状態を保っていたものではない。恐らくこれは玄室内にあったものが盜掘の際に外に持ち出されたものであろう。そうだとすれば8号横穴のものとして最も古く、この横穴の構築時期を示すものと考えて良いであろう。須恵器編年第Ⅳ期前半にあたるものであろう。

墓道から出土した土器中に1点ではあるが第Ⅳ期後半に含まれる杯がある(19図13)。さらに先にも述べたように封鎖石の下から遺物が出土した事により追葬を考えたので、それらを含めて整理してみると、須恵器編年第Ⅳ期前半に横穴が作られ、第Ⅳ期後半に追葬があり、さらに続いて第Ⅴ期に2回の追葬があった。従って都合4回の埋葬があったと考えて良いであろう。

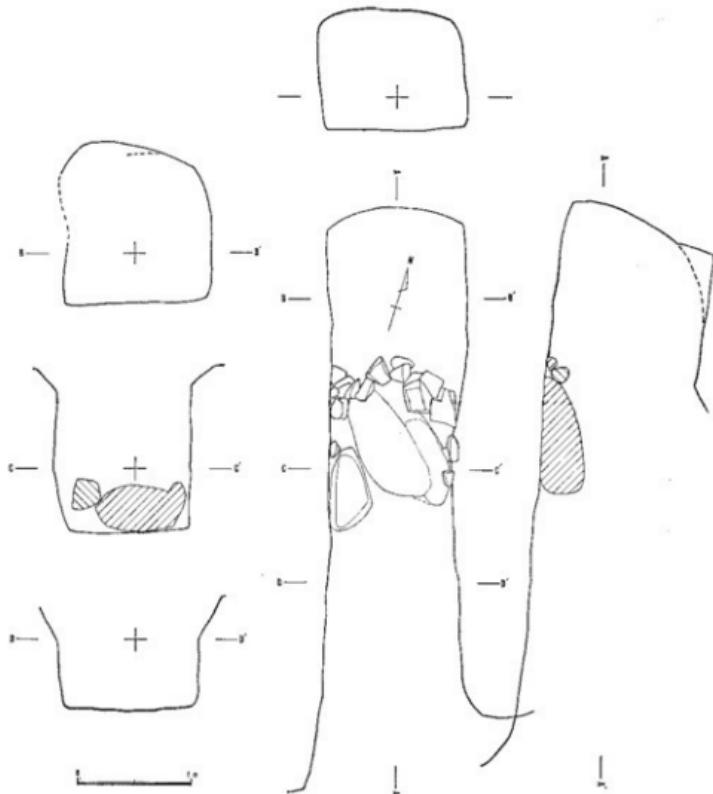
9号横穴

8号横穴の右側に位置し、この横穴群では最も右側に位置している横穴である。既に開口しているが、封鎖の部分から前が長く墓道にあたる部分の大半が埋没している事が考えられたので、その後出土作業を中心に発掘作業を実施した。排土作業の結果、埋っている部分は少くこの横穴が8号横穴より高い所に位置している事がはっきりした。

横穴は玄室と墓道の区別がなく、封鎖石のおかされている部分がやや狭くなっている(1.1m)他は墓道部分から奥壁までほぼ同じ幅(1.2m)をもっている。玄室は奥行が封鎖石の内側から奥壁まで1.2mと短く、ほぼ正方形に近い形をしているが、墓道、封鎖部分の占める割合が大きく、本来はおそらく長方形に近い平面形となるものであろう。6号横穴、10号横穴と良く似た平面形を持っている。すでに盜掘を受け開口しているので、玄室内に遺物は全くなかった。玄室の天井は高く、断面は奥壁を見るように正方形に近い形をしている。封鎖石が残っており、風化した砂岩の大型の礫を使った部分と、その内側に板灰石の角礫を使用した部分がある。角礫を取り除いた下から須恵器及び土師器の杯が出土しており、追葬のあった事を知る事ができる。又墓道の床面からかなり高い位置で刀子の小破片が出土したが、おそらく8号横穴の場合と同様、玄室内にあったものが盜掘により運びだされたものと考えられる。又墓道床面に密着した状態で須恵器が出土している。出土した須恵器は全て須恵器編年第Ⅳ期にあたるものであり、奈良時代前期と考えられるものである。従ってこの横穴は奈良時代に築造され、同じ須恵器によって示される時期内に追葬がおこなわれたと考えて良いであろう。

墓道は封鎖部分から前方に3m程延びており、それから先は山の自然傾斜に入り消えている。墓道の床はほぼ平坦であり、幅は先にも触れたように1.2m程で、先端から封鎖部分までほとんど変らず、又玄室とも同じような広さをもっている。

9号横穴の東側は岩が張り出し、少し高くなっている。その岩の大半を壠って墓道が作られているわけであるが、その張り残したところに周囲より少し掘んだところがあり、横穴の存在を思わせたので、試掘をおこなった。横穴の入口に良く似た状態で1m程の幅に掘られた部分が認められた。ノミ痕の観察によれば、他の横穴掘削の時と同様の工具を使用しているようであるが、これが他の横穴と同時期のものであるとすれば、どういう意味を持つものであろうか、良い考案がない。



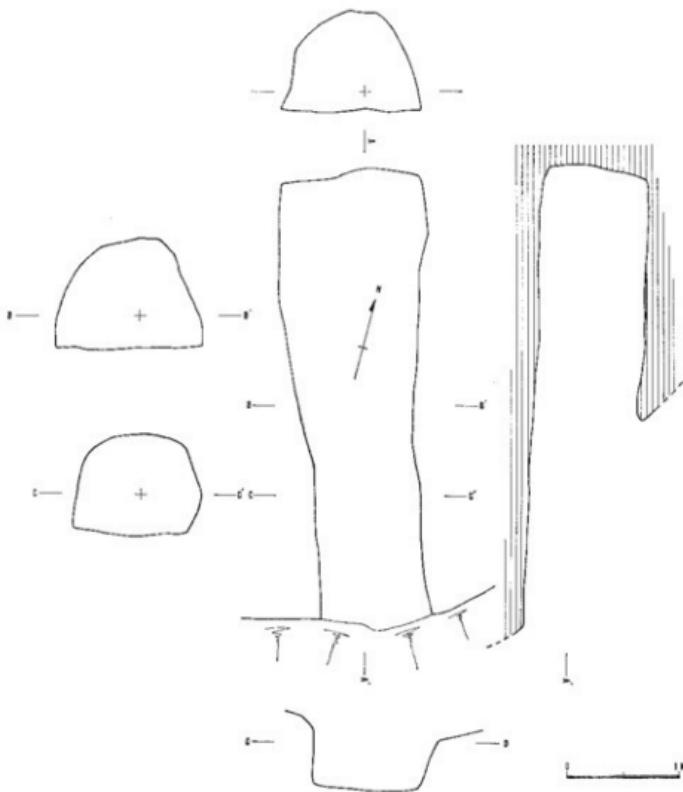
第17図 9号横穴実測図

10号横穴

8号を中心とする一群の中では最も低位置に存し、かつ最も小型である。

奥行2.25m、幅1.20m、玄門部分を明瞭にしがたい長方形プランで、高さも95cmで玄門まではほぼ同じ高さである。断面は蒲鉾形であるが天井部に屋根形の棱をわずかに残している。壁面の整形は荒くノミの痕跡が筋となって残されている。

調査前の状態では、かなりの流入土が埋められわずかしか開口していなかったので期待していたが遺物は須恵器破片3片のみであった。



第18図 10号横穴実測図

V 出 土 遺 物

土 器

須 惠 器

今回の調査により出土した須恵器は29点であり、先にも述べたように大半が8号横穴の前海からであった。これ以外にも1号・2号横穴の墓前域を中心に時代の降るもののがかなりの量出土しているが、これらは全て除外した。

出土した須恵器は大略3期に分ける事が可能である。

1 (19図11・12)

口径10cm前後の小形の杯である。11は蓋受のついた杯身と考えられない事もないが、ここでは身受のついた蓋として図示した。須恵器編年第Ⅳ期前半と考えられるものである。

2 (19図13)

1点のみであるが、比較的深い杯の身である。恐らく頂部に模宝珠を持ち、身受けのついた蓋が伴うものであろう。この地域でも出土例あるいは出土量共に多いものではないが、第Ⅳ期後半と考えて良いものである。

3 (19図1~10・14~20・20図21~27)

今回出土した須恵器のはば大半を占めるものであり、須恵器編年第Ⅴ期に含まれるものである。実年代を奈良時代前半期に求められるものである。駿河東部地域・伊豆地方の古墳にかなりの量が含まれているようである。

土 師 器

今回の調査では6点の土師器が出土した。全てが杯である。焼成がさほど良くない上に整理作業時に水洗を強くしすぎたために表面の観察が困難になり、暗文が施されていたが、確認に時間がかかった。

器形は共に口縁部下部にわずかに段を成している。この地域での比較資料に乏しいので、関東地方の土師器の編年に対比すれば、鬼高Ⅱ式あるいは貞間Ⅰ式に対比し得るであろう。内側に暗文を施した例が3例含まれているが、6の如く上下2段に施している例は、畿内地方でも奈良前期に含まれている例が多いようであり、又遠江の伊場遺跡においても同様な事が観察されており、同時に出土した須恵器との対比に矛盾はないようである。

鉄 器・そ の 他

今回の調査において8号横穴・9号横穴の墓前域より鉄鏡・刀子の破片が各1点づつ出土した。埴土上部から出土しており古く横穴玄室が攪乱された時に持ち出されたものであろう。共に少破片であるので図示はしなかった。

土器・鉄器の他に図示はしなかったが、主に1号・2号横穴の墓前域より五輪塔の破片等が出土している。

須 惠 器

器種	図版番号	出土地点	法量(cm)	形態上の特徴	技法上の特徴	備考
杯蓋	図 1	8号横穴 前溝	口径(16) 器高(4.1)	強く折り反した口縁部が厚く作られている。頂部に凝宝珠状の摘みを持つが、高さに比較して丸味を持っている。	器面全体にロクロ整形の痕を残している。	全体の16個の破片から推定復元
杯蓋	図 2	8号横穴 前溝	口径 17.8 器高 4	口縁端を強く折り反している。 作りは薄手である。	表面は全面へ整形をしている。	
杯蓋	図 3	8号横穴 前溝	口径(15.2) 器高(3.5)			暗灰色を程し焼成は良くない。 全体の16個の破片から推定復元
杯蓋	図・版 4	8号横穴 前溝	口径 15.7 器高 2.7	口縁部の先端に平坦面を作りさらに内側に強く折れている。頂部に凝宝珠状の摘を持っています。	器面全面に水挽の痕があるが、頂部はヘラ削りによる整形をしている。	灰色を程し焼成は良好である。
杯蓋	図・版 5	8号横穴 封緘石下	口径 10 器高 3.5	口縁部端の折り反しは丸味を持っている。頂部に凝宝珠状の摘を持っています。摘みは丸味を帯びている。	器面全体にロクロによる整形の痕があるが、頂部にはヘラ削りの痕がある。内側は指頭による凹凸がある。	焼成時に摘の部分が変形している。
杯蓋	図・版 6	8号横穴 前溝	口径 15.7 器高 2.7	口縁部の先端に平坦面を作り、さらに内側に強く折り反している。頂部に凝宝珠状の摘を持っています。摘は全体に丸味を帯びている。	器面全体にロクロによる整形の痕があるが、頂部にはヘラ削りの痕がある。	
杯身	図・版 7	8号横穴 前溝	口径 14.9 器高 4.1	口縁はやや外反し底部は平坦であり、角ばった縁を持ち、高台をつけている。	器面全面にロクロ整形の痕が明瞭である。底部はヘラで削っている。高台をつけた部分が明瞭である。	
杯身	図 8	8号横穴 前溝	口径(15) 器高(4)			全体の16個の破片より推定復元
杯身	図 9	8号横穴 前溝	口径(14) 器高(4)			タ

器種	図版番号	出土地点	法量(cm)	形態上の特徴	技法上の特徴	備考
环身 ・版	図 10	8号横穴 前溝	口径 10.1 器高 4.3	口縁は薄くやや外反して いる。底部は平坦であり 高台をついている。	器面は全面にきれいに整 形されている。底部はヘ ラ削の痕がある。	青灰色を程 し焼成良好 である。
环身 ・版	図 11	8号横穴 前溝	口径 (10) 器高 (3.7)			全体の均程 の破片より 推定復元
环身 ・版	図 12	8号横穴 前溝	口径(10.6) 器高 (3.4)	口縁は丸味を帯びやや内 反している。 底部は平坦に近い。	器面はきれいで、全体に 作りはていねいである。	灰白色を 程し焼成は 良好である 全体の均程 の破片であ る。
环身 ・版	図 13	8号横穴 前溝	口径 12.8 器高 4.2	口径に対し器高が高く、 全体に深い器形をしてい る。 口縁は直口している。	器面全体にロクロによる 整形がされている。 底部はヘラ削であり、多 少の凹凸がある。	
平版	図 14	8号横穴 前溝	最大径 13 器高 6.2	頭は細く、口縁は外反し ている。肩の部分が強く 角を成しており、全体に 偏平な形をしている。	器面全体にロクロによる 整形の痕を残しており、 底部はヘラ削である。上 部に粘土の凝結の痕が、 多少の凹凸を成してい る。口縁部内側に粘土を つなげて整形した痕が ある。	
扉 ・版	図 15	8号横穴 前溝	最大径 (11.7) 器高(現在) (8.5)	肩部の張りが弱く、全体 に丸味を帯びている。底 部は平坦であり、高台を ついている。	器面全面がきれいに整形 されている。注口部分は 整形後つけており、穴は 外側からあけている。	口径部欠失 灰白色を 程し焼成は 良好である
長頸壺 ・版	図 16	8号横穴 前溝	口径 11.8 最大径15.6 器高 24.9	外反する口縁を持ち、頸 部は直行して胸部と角を 成して接合している。肩 部が張り角を成してい る。底部は平坦に近いが 高台を付している。	頸部はロクロ整形である が、底部には未整形の凹 凸がある。肩下部はヘ ラで整形している。頸部 ・肩部の二ヶ所で粘土を 継いでいる。	灰白色を程 ししている。頸 部から上が 焼成時にひ ずみが出て おり多少傾 斜している
壺	図 17	8号横穴 前溝				肩下部及 び底部破片 である。
短頸壺 (四耳壺) ・版	図 18	8号横穴 前溝	口径 11.2 器高 11.7 最大径18.6	頸部は短く、口縁は直口 する。肩部は張っており、 角を成して折れる。底部 は平坦で高台をついてい る。	肩部で粘土を継いでおり 肩下部はヘラで整形し ている。	肩部に4つ の突起のあ る四耳壺で ある。

器種	図版番号	出土地点	法量(cm)	形態上の特徴	技法上の特徴	備考
盤	図・版 19	8号横穴 前溝	口径 22 器高 8	外反する口縁を持った浅い盤であり、円筒形の脚を持っている。脚に長方形のスカシがある。		
壺	図・版 20	8号横穴 前溝				長頸壺の口頭部破片である。
杯蓋	図・版 21	9号横穴 前溝	口径 15.7 器高 4.2	口縁部は強く折り反している。頂部に慶宝珠状の擴を持っている。	頂部はヘラで整形している。	
杯蓋	図・版 22	9号横穴 封頭下	口径 15.7 器高 3.2	口縁近くに平坦部を持ちほぼ直角に折り反している。口径に比較して器高が少く全体に扁平な感を与える。	頂部はヘラで整形している。裏側は整形時の凹凸が多い。	裏側に焼成時の変形がある。
杯身	図 23	9号横穴 前溝	口径(14.2) 器高 4.3	口縁はやや外反している。底部は平坦であるが高台をつけた部分が明瞭である。	端面全体にロクロ整形の痕がはっきりしている。底部はヘラで整形している。	全体の過程の破片より復元全体に焼成時のひずみがある
杯身	図 24	9号横穴 前溝	口径 14.9 器高 4.3	口縁は直行し底部へのまがりは比較的弱く高台を付けているが、高さは底の部分と一致する。	全体にロクロによる整形の痕が著しい。底部はヘラ削りである。	
杯身	図・版 25	6号横穴 前溝		口縁はやや外反し口唇部は内側削ったように薄くなっている。底部は丸味を帯び、中心部分では高台の高さと一致する。	内側はロクロ整形の痕が残っている。底部はヘラ削っている。	灰色を褐しておらず、焼成は比較的あまい。 伊豆長岡町教育委員会採集
杯身	図・版 26	9号横穴 前溝	口径 14 器高 4.2	口縁は外反する。底部は丸味を帯び高台をつけている。	器面全体がロクロにより整形されている。	全体に焼成時のひずみがある。
壺(長頸壺)	図・版 27	8号横穴 前溝	最大径16.9			長頸壺であるが、頸部以上が欠失している。

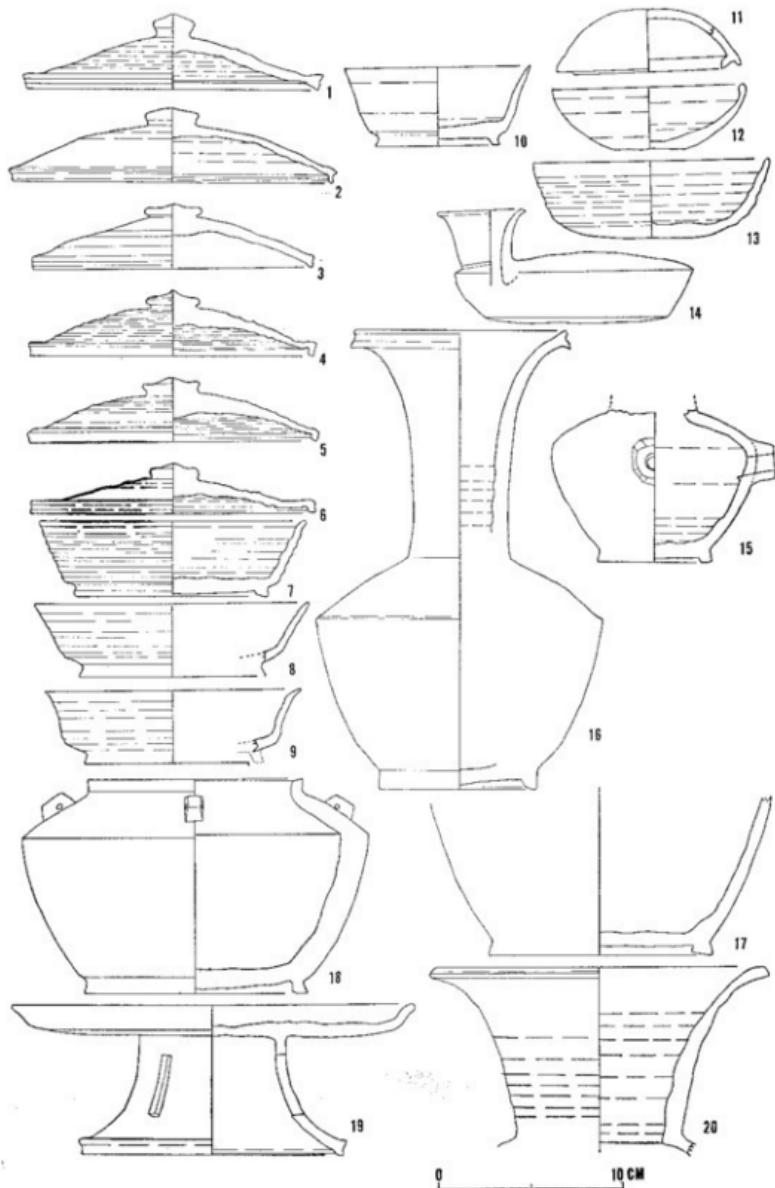
器種	図版番号	出土地点	法量(cm)	形態上の特徴	技法上の特徴	備考
大壺	図・版 28	8号横穴 前溝	口径 22.4 最大径 46.2 器高 46	直行する口縁を持ち、底部がやや張り気味で丸底である。	全体を粘土帶を積み上げる事で作っており、器面外側に施目がついている。内側は良く整形している。	
大甕	図・版 29	8号横穴 前溝	口径 16 最大径 31.4 器高 (29.5)	直行する口縁を持ち胴張った壺である。底部は丸底であるが少し尖り気味である。	全体に粘土の帯を積んで作っており、内側にタタキ目がある。底部に近い部分はヘラで削っている。	肩部で接合できず二つに分かれている。

土師器

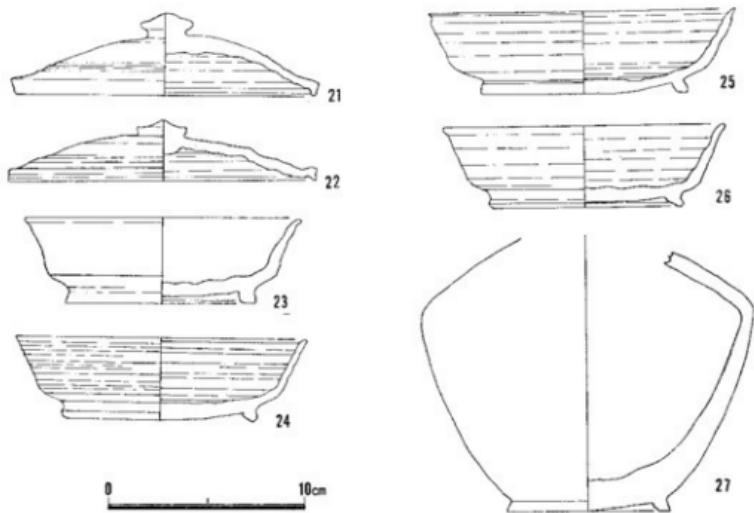
器種	図版番号	出土地点	法量(cm)	形態上の特徴	技法上の特徴	備考
坏	図・版 1	8号横穴 前溝	口径 15.8 器高 3.9	口縁部は外反し脇部・口縁下部にわずかに稜を成している。	口縁部から内側全体に横ナデによる整形が成されている。	褐色を積し続成は良くない。
坏	図・版 2	8号横穴 前溝	口径(15.2) 器高 (3.4)	口縁はほぼ直行するが、口縁直下に指頭の横ナデによる凹が出来、わずかに外反しているように見える。	口縁部から内側全体に横ナデによる整形が成されており外側は底部までヘラ削をしている。	外側は暗褐色内側は褐色を程している。全体の多く存
坏	図・版 3	8号横穴 前溝	口径(14.6) 器高 (4.0)	口縁は直行し脇部稜を成している。	口縁部外側より内側全体にかけて横ナデによる整形が成されている。外側は整形なく多少の凹凸がある。	内側赤褐色外側は黄褐色、全体の多く存
坏	図・版 4	8号横穴 前溝	口径 19.0 器高 6.0	口縁部はやや外反し脇部の口縁直下に稜を成している。	口縁外側から内側全体にかけ横ナデによる整形をし、外側はヘラ整形をしている。内側に2段に円形の暗文が施されている。	褐色、器面の保存が良くない。
坏	図・版 5	8号横穴 前溝	口径 15 器高 3.4	口縁はやや外反する。	口縁部外側より内側全面に横ナデによる整形がされている。外側はヘラによる整形が全面に成されている。器面内側に暗文が施され、連続した円形を画いている。	赤褐色を積し、器面の保存は良くない。 全体の多く存
坏	図・版 6	8号横穴 前溝	口径(18.5) 器高 (5.9)	口縁部はやや外反し、口縁下部にわずかに稜を成している。口径に比較し器高が高く、全体に厚みのある感じを受ける。	内側は口縁下から続いて横ナデによる整形がおこなわれ、外側はヘラによる整形がされている。暗文が2段に施されている	赤褐色を程するが器面の保存が悪い。 全体の多く存

○図は実測図・版は写真図版を示す。両者の番号は一致させてある。

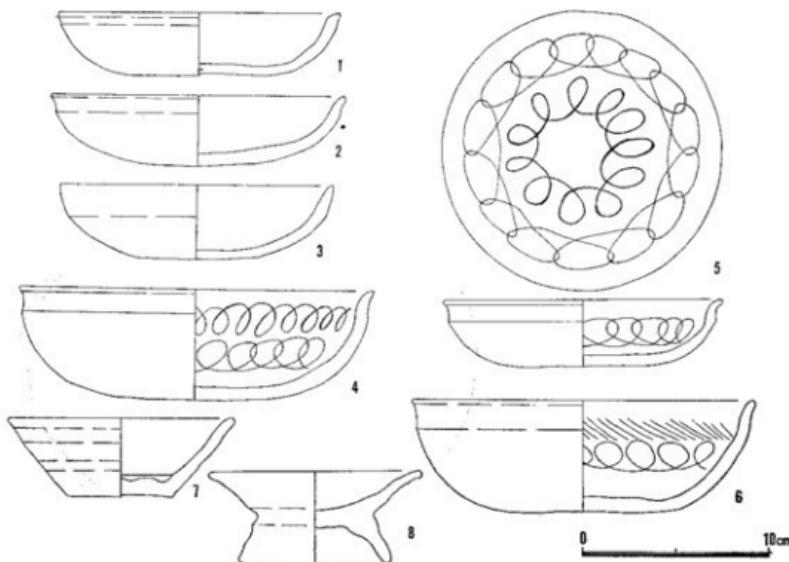
○()は図上の復元推定値である。



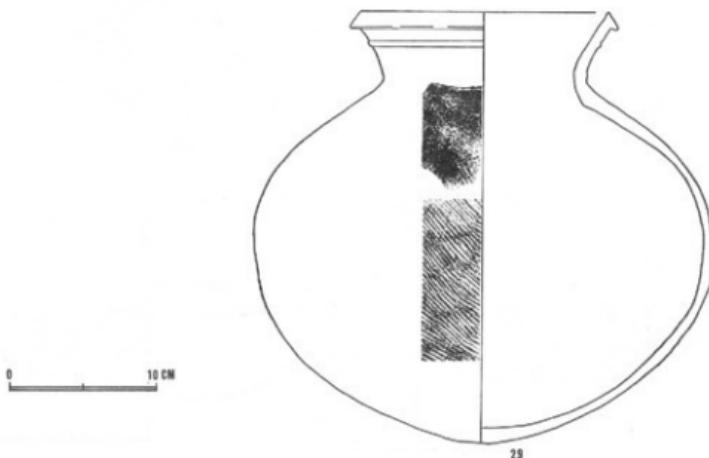
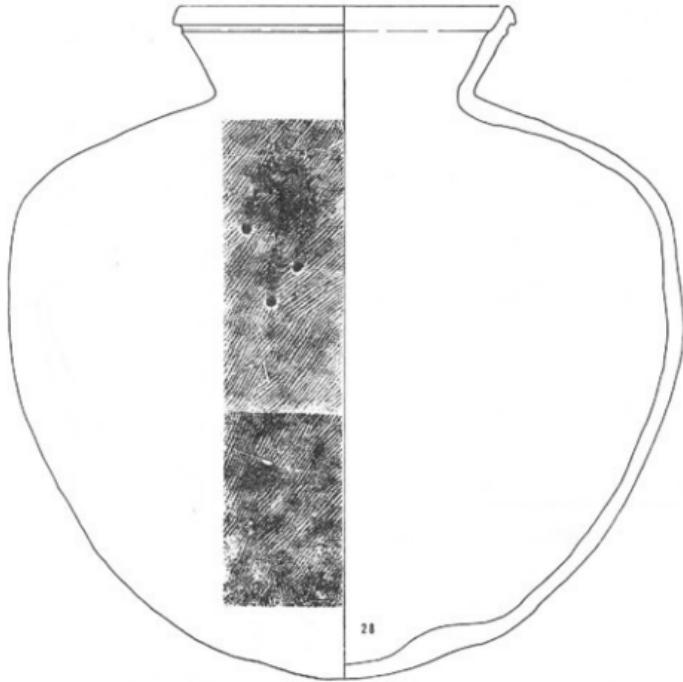
第19図 8号横穴出土須恵器実測図



第20図 6・8・9号横穴出土須恵器実測図



第21図 8号横穴出土土師器実測図



第22図 8号横穴出土須恵器実測図

VII 横穴群の年代と群の構成について

横穴群の年代

各横穴群の調査の概要と出土遺物について説明してきたが、次にこの横穴の年代等について整理してみよう。

從来後期古墳の調査は駿河、伊豆においてもかなりの数が調査されており、出土した須恵器も相当量が蓄積されてきているが、その編年については明示されたものがない。特に終末期と考えられる古墳については、調査資料が充分公開されているものの数が少い事もあって、年代観等も充分整理がされていないようである。従って少し隔れた地域であるが、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器の生産地域をひかえている逆江における須恵器の編年[※]を参考に、この古墳群の年代を考えて見よう。

* 逆江における須恵器の編年については『大沢川尻古墳跡調査報告書』逆江考古学研究会1966.に述べられたものがあるので、それを基本にすることにした。しかし最近の調査結果等により多少の修正が必要である。特に第V期については、報告書中でも述べられているように検討する必要がある。7世紀から10世紀にかけての須恵器については、伊場遺跡の調査により紀年のある木簡と判出した資料によってかなり明確になりつつある。現在資料整理中であるが、調査中の所見として述べられたものがある。『伊場・第4次調査月報5』(浜松市遺跡調査会1972)又平城宮跡を始め近畿地方を中心に全国的な宮殿・官衙等の調査の進展により、この期の土器の年代は急速に明らかになりつつあるので、それらを参考に『大沢川尻古墳跡調査報告書』における編年及び年代比定を多少修正しつつこの横穴群の年代を考えてみよう。

今回調査した6基の横穴のうち、多少なりとも遺物の出土したもの、あるいは確實に出土した事が知られるものは6号・8号・9号・10号の4基の横穴である。

6号横穴からは以前町教委の手で須恵器が採集されており、伊豆長岡町立郷土館に保管されていたので、今回その資料も収録した。20図25に示したものがそれである。第V型式に含まれるものであり、奈良前期と考えて良いであろう。従って6号横穴の時期をそこ求めることができる。

8号横穴の墓道及び封鎖部分から須恵器25点、土師器6点が出土した。19図11に示した須恵器は約14cm程の破片であるが、墓道の覆土から出土したもので、身に蓋受けのついた壺の蓋である。推定口径11cmであり、第IV期前半の土器で7世紀中頃と考えて良いであろう。19図13に示した土器は壺身だけであるが、口径12.8cm程あり第IV期後半の土器であり実年代を7世紀の末と考えてよい。追跡時の遺物と考えられる。19図7～9に示した土器は高台を持った壺であり、同じく19図1～6はそれに組合わされた蓋である。第V期に含まれるもので8世紀前葉と考えられるものである。従って8号横穴は7世紀中頃に掘鑿され、8世紀始めまで使用されたものと考えて良いであろう。

9号横穴の墓道、封鎖石の部分より19図22～24に示した須恵器の壺が出土している。高台を持った壺であり、第V期の須恵器である。

遺物が出土しているのは4基の横穴であるが、又10号横穴の墓道の部分より、須恵器壺の破片が出土しているが、8号横穴の墓道より転落したものであり、10号横穴の年代の決定にはならなかつた。以上を整理してみると次のようである。

横穴名	年代		
	7世紀(中)	7世紀(末)	8世紀(前)
6号横穴			○
8号横穴	○	○	○
9号横穴			○

群構成と掘鑿の順序

先にも述べたように、大師山横穴群は位置及び墓前域のあり方等より2~3単位群[※]に分けることができる。7号横穴から10号横穴までは位置的にも纏まっており、6号横穴墓前域東側のあり方を検討し、6号までの横穴とは異なる単位群として、1つの纏りを示すことについては先にも述べてきた。これをB単位群と呼ぶことにする。

※ 単位群 横穴群(古墳群)を構成する最少の纏りの単位を示すことばとして使用する。その纏りが具体的に何を意味するかについては今後の問題とし、ここでは触れないこととする。

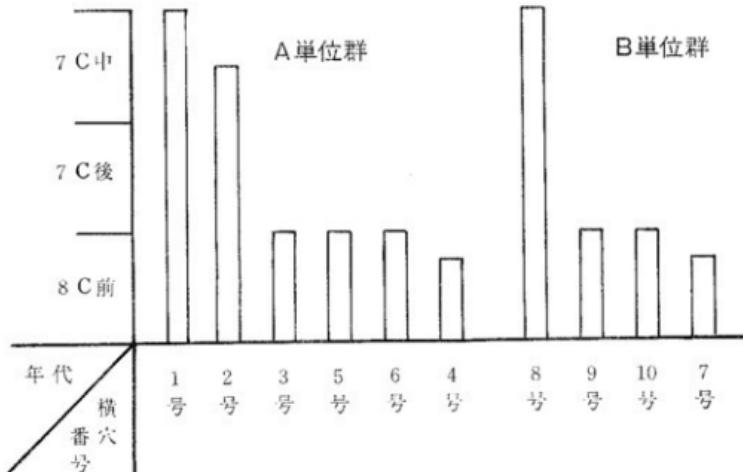
3号・4号・5号・6号の各横穴は墓前域をほぼ共有しており、各横穴ともほぼ同じ規模、同じ形態を持っており、1単位群を成すことは明らかである。残る1号・2号横穴についてはこれと多少異なるが、調査前に1号・2号横穴の墓前域のように見えた部分は実際にはほとんどなく、1基各に独立しており、位置的には他の横穴よりも多少高い所に造られているが、横穴の開口部分の壁面は3号横穴以下と連続しており、これらをA単位群として考えられよう。これをA単位群と呼ぶことにした。これを表に示せば以下のとおりである。

	横 穴 名
A 単位群	(1号・2号)・3号・4号・5号・6号
B 単位群	7号・8号・9号・10号

○印は調査を実施したもの

次に各単位群の横穴の掘鑿の順序について考えてみると、A単位群では1号横穴が最も高い位置にあり、規模も最大である。さらに内部構造も石棺を持っており複雑である。一般的に大規模で、内部構造の複雑なものが各横穴群で早い時期に掘鑿されているのが一般的傾向にあるので、この単位群中1号横穴を最も古い位置におくことができよう。続いて2号横穴が掘鑿され後に3号・5号・6号の各横穴が作られている。各横穴間の間隔はほぼ一致しており、極く近い時間帯に作られた事を知ることができる。4号横穴は3号と5号横穴の間にあり、横穴間の距離が狭いので、少し高い所に作られており、3・5・6号横穴よりは多少遅れたのかもしれない。

B単位群では8号横穴が最も早く造られ、次に7号横穴あるいは9号横穴が造られている。10号横穴は8号・9号横穴の間にあり、それらの横穴をさけて作るために1段低く作られている。従っ



て10号横穴が最も後で整られたのと言う事ができよう。以上を整理すると次のようになろう。

大師山横穴群を2つの単位群に分け、築造の順序を以上のように考えたが、こうしたあり方は他の古墳群でも認められるようである。袋井市地蔵ヶ谷横穴群[※]（平野1963）では4～5基の横穴を単位に4単位群が存在している。調査された八单位群は5基の横穴からなり、第Ⅳ期前半～第Ⅶまでの須恵器を出土している。

[※] 地蔵ヶ谷横穴群は東海道新幹線建設により一部が破壊され、その際調査された。その後市立幼稚園の拡張により破壊される事になり、袋井市教育委員会の手により調査されている。現在資料の整理中である。

又掛川市岡津横穴群B群（向坂1968）の場合には16基の横穴からなっているが、前庭部を共有する4つの単位群に分ける事ができ、1単位群は5基～3基で構成される。それぞれに第Ⅲ期後半の須恵器を伴う横穴が1基づつ含まれ、第Ⅳ期ついで第Ⅴ期までの追跡がおこなわれている。又三島市赤王横穴群でも4基によって1群が成立している。これに良く似た事は墳丘をもった古墳群でも分析されている。たとえば島田市水掛渡A古墳群では2～4基の単位群によって構成されており（向坂・平野・山村等1965）年代は7世紀中葉を中心としている。

このように後期の群集墳は基準的な1単位群が4～5基程度で構成されているものが多いことを知ることができる。100基、200基と数多くの古墳（横穴）で形成されている群集墳も最少単位は4～5基程度であり、それが集まって大古墳群を成している事を理解できるようである。このことは過去に何人かの人々によって指摘されている事もある。この最少単位となる単位群の歴史的性質については種々論議があるが、古墳群（横穴群）の形成された時期の社会の分析と合わせて慎重に検討する必要があろう。

VII 横穴群調査における2、3の問題

1 北伊豆における横穴群の発生と分布について

駿河の東部から北伊豆にかけて分布している横穴の数は昭和36年における静岡県埋蔵文化財分布調査の時確認したもので29ヶ所であり、その後昭和45~47年に実施された分布調査により33ヶ所が確認されている。横穴群の名は一表に示したとおりであるが、土取り、宅地造成等の開発の進展により破壊、消滅したもののがかなりの数に及んでいる。

横穴群の分布は大きく見て

- ① 狩野川流域の平野を囲んだ山裾に位置するもの、これらの中には東岸に位置する函南町柏谷百穴、大仁町宗光寺横穴群と西岸に位置する伊豆長岡町岩鼻横穴群、大山、鷲頭山の山塊の周囲に分布する横穴群に連なっており、江ノ浦凝灰岩の露頭地域に造られている。
- ② 三島平野北部に位置するもので、寺門横穴群に代表されるもので、大規模なものはない。
- ③ 駿河湾沿いに位置するもの、江ノ浦横穴群に代表されるものとの三者に分かれる。

分布の中心を成しているのは狩野川流域の西側、徳倉山、鷲頭山塊の周辺であり、江ノ浦横穴群等駿河湾沿いの横穴群もこれに含まれる。この地域の墳丘を持った古墳群が、須戸古墳群、石川古墳群、井出古墳群、土狩古墳群等に代表されるように愛鷹山々麓を中心に分布しているのに対し、横穴群の中心は南に下って狩野川流域と対称的な位置を占めている。これは単に横穴の掘鑿しやすい凝灰岩の露頭地域であるという事だけではないようである。

これらの横穴群のうち学術調査が実施され報告の公刊されているものは宗光寺横穴群（中川、岡本1966）、柏谷百穴（輕部1948、山内等1974）、赤王横穴群（山内1965）、江ノ浦横穴群（鶴川1974）の4群しかなく、又横穴群全体を調査したものはない。

宗光寺横穴群 大仁町宗光寺

昭和32年中川成夫氏により調査、約30基の横穴を確認し、うち4基を発掘、清掃と実測の調査をおこなった。横穴の形態は玄室と羨道の区別のないものが中心であり、出土した須恵器により13号横穴は須恵器編年第Ⅶ期後半、第Ⅷ期（7世紀後半～8世紀）、22号横穴は第Ⅷ期前半（7世紀中葉）と推定されている。凝灰岩地帯の中に掘り込まれており、横穴の形態は多少の変化があるようである。

赤王横穴群 三島市赤王

昭和38年輕部慈恩氏により調査、横穴群全体としてはかなりの数の横穴があったが、大半が防空壕等の掘鑿により破壊されており、現存するものの数は少い。全体で4つの単位群から成り立っており、そのうち4基の横穴からなる1群を調査している。横穴の形態は玄室の平面形が正方形に近く、羨道と玄室の区別のはっきりしているものと、玄室と羨道の区別がなく袋状の平面形を持ったものとの二者に分ける事ができる。2基の横穴より須恵器が出土しており、それによれば第Ⅷ期後半（7世紀後半）であり、併せて横穴の掘鑿の順序から考えて、この横穴群は第Ⅷ期後半以後に形成されたものである。

柏谷百穴 須南町柏谷

昭和22年権部慈恵氏により調査、開口している横穴を中心に111基の横穴を確認し、横穴の計測をおこなった。それを基に横穴の形態を5つに分けている。それらのうちでは1類型と呼んだ長方形の玄室を持ち、羨道と玄室の区別のあるものが最も多く、全体の約半数を数えている。この調査により出土した資料は日本大学（三島）に保管されており、出土須恵器の検討によれば、須恵器編年第Ⅳ期前半（7世紀中葉）から第Ⅶ期（8世紀前半）までのものを含んでいる。又昭和48・49の両年度にわたり、静岡県教育委員会・須南町教育委員会の手で再度調査を実施し、未確認横穴の探査及び一部分の横穴の発掘と清掃、実測をおこなった。全体で未開口の横穴を含め200基以上の横穴によって構成されている事が予想されそのうち13基の横穴の発掘と清掃、実測をおこなった。その結果5基の横穴から遺物が出土した。それによれば7世紀後半～8世紀前半に位置付けて良いものである。

江ノ浦横穴群 沼津市江ノ浦

昭和50年に地形測量を中心とした調査をおこない、横穴の基數と位置を確認した。その結果4地区に分かれ総数84基の横穴が確認された。從来採集されている遺物の検討によると中心はやはり須恵器編年第Ⅳ期～Ⅶ期であるが、1点第Ⅲ期末に含まれる資料がある。この土器が江ノ浦横穴群のどの横穴から出土したのかは不明であるが、江ノ浦横穴群から出土した事が確実であれば、今の所伊豆の横穴から出土した資料としては最も古いものである。この時期に極く1部の横穴が掘られていた事を示すものであろう。

調査された各横穴の年代を見ると、江ノ浦横穴群に須恵器編年第Ⅲ期末に属する土器が1点あるが、他は宗光寺横穴群、柏谷横穴群、大師山横穴群とも須恵器編年第Ⅳ期前半（7世紀中葉）に属するものが最も古い事がわかる。続いて赤王横穴群のように7世紀末に始まっているものもあるが、大半の横穴群では先に掘られているものへ追跡あるいは隣接地へ新たに掘削を始めている。*

宗光寺百穴においても権部氏の調査資料中1点須恵器編年第Ⅳ期に属するかと思われるものが含まれている。

しかし須恵器とは異り酸化焰により焼成されており、赤焼の須恵器と呼んだ事があるが、確実なものでない。あるいは柏谷百穴においても1部は7世紀前半に上り得るもののが含まれているかも知れない。又赤王横穴群は4群ある単位群中の1群の調査であり、出土資料を全て実見しているわけではないので明確でない。あるいは7世紀中葉にあたる資料が含まれているかも知れない。

さらに多くの横穴群においては8世紀に至り、横穴の数は急激に増加し、同じ土器（第Ⅶ期の須恵器）に示される時間内に追跡がおこなわれたものも少くない。各横穴群の形成の段階を模式的に見れば、先に述べたように大師山横穴群B単位群におけるようなあり方を典型的に展開したようである。

横穴の構築及び横穴への副葬は出土している須恵器で見るかぎり8世紀前葉でほぼ終っているようである。最終式を示すものは宗光寺横穴群から出土した火葬骨を納めた小型の石棺が考えられるが、大師山1号横穴に見られる小窓穴が火葬骨を埋納したものであるとすると類例を追加したことになる。これによって火葬の風習の一般化と、この地方における横穴の終焉を示すとする事は難しいであろう。おそらく横穴の終末は他の政治的要因が中心に考えられる必要があろう。それはとも

かくこの地域における横穴の終末は遅く見ても奈良中期であり、これは同時にこの地域の横穴式石室をもった古墳の終末ともほぼ一致するようである。

北伊豆における横穴群の発生を極く早く見て1部で7世紀前葉、大半を7世紀中葉と考え、7世紀～8世紀の初めに中心がおかれて、8世紀の前葉で横穴の使用がほぼ終ると考えれば、その間長く見ても100年の事であり、横穴に葬られた人々は長く見て2～3世代、短いものはわずかに1世代であろう。

こうした北伊豆の横穴群のあり方は同じ静岡県内の横穴の中心である遠江地方、あるいは関東地方の横穴群と多少異なるようであり、特に遠江地方の横穴が遅くとも6世紀中葉には築かれ始め、8世紀までおよそ200年間続く事と比較すると極だった差を見せてている。そうした北伊豆における横穴群の特色を生んだ歴史的な背影は何であったか、同じ北伊豆における古墳群のあり方あるいはこの時期にすでに建立を始めていたであろういくつかの寺院の存在等を含めて、今後検討する必要がある。

2 家型石棺について

静岡県内における家形石棺の出土例は筆者の知るかぎりでは県東部を中心に9例あり、さらに不明確であるが家形石棺であろうと思われるものを加えると12例になる。これらのうち学術調査がおこなわれたものは大師山横穴を含めて、賤機山古墳・丸山古墳・下土狩西1号墳・平石4号墳の5例であり、副葬品等により年代の推定できるものは4例である。他は実測図も公表されていないので、いくつかの文献に引用されている割には不明な部分が多い。従って資料を多くの人々と共有する事を考え、今回これらのうち実測可能なものを実測し以下に示した。以下それらについて出土した古墳と共に多少の解説をしよう。

1. 賤機山古墳

所在地 静岡市宮ヶ崎町浅間神社境内

文 献 後藤守一・斎藤 忠「静岡賤機山古墳」 静岡市教育委員会 昭和28年

静岡平野を見下す賤機山山頂の尾根に築かれた古墳であり、昭和26年に調査されている。多少変形しているが復元推定によれば径32m、高さ7mの墳丘を持った円墳である。長さ6.8m・幅2.4mの両袖型の大型の石室を持ち、石材は大きな石を使用している。

石棺は全長2.4m（縄懸突起を入れると2.9m）幅は約1m程の家形石棺であり、棺蓋は四柱造りの屋根を成している。平の部分に3対6個、妻の部分に1対2個、計8個の縄懸突起を有している。棺身は刳り抜式である。精巧な作りの馬具を始め、豊富な遺物を副葬しており、6世紀後半と考えられている。

2. 丸山古墳

所在地 静岡市大谷字宮川

文 献 望月董弘・手島四郎 他「駿河丸山古墳」 静岡市教育委員会 昭和37年

静岡平野の東側、有東山西麓にあり、附近に諏訪神社古墳を始め、いくつかの古墳が存在している。墳丘は耕作等により変形しているが、径21m程の円墳であり、墳丘の高さは調査時に2m程で

ある。

両袖の横穴式石室を主体部にし、玄室の長さ4.1m、羨道部の長さ5.6mを数え、幅2.4mである。玄室の奥壁寄りに組合式箱形石棺があり、羨道の玄室近くに家形石棺がある。石室の崩壊により石棺は大きく破損しているが、計測・復元の結果、棺蓋は長さ210cm、幅92cm、四柱造りで平に3対6個、妻の部分に1対2個、計8個の撫摩突起を持っている。棺身は割り抜式であり、長さ210cm、幅89cm、高さ68cm程である。石材は板灰岩（伊豆石）である。鉄製品と共に多くの須恵器を副葬しており、6世紀後半～7世紀中頃にかけてのものであるが、出土状態の観察により、この家形石棺は追葬されたものである事は明らかであるので、7世紀前～中葉にかけてのものであろう。

3. 下土狩西1号墳

所在地 駿東郡長泉町下土狩

文 献 小野真一「長泉郷土誌」長泉町教育委員会 昭和40年

宅地造成工事中の応急の調査であり、古墳の規模、その他については細かな計測はできなかったようであるが、径20m程の円墳であり、主体部は横穴式の石室で長10m、幅2m、奥壁の鏡石の高さ2.5m程の大きなものであり、この地域では指揮の規模を持ったものである。石棺は石室奥壁寄りにあり、発見時に既にブルトーザによって破壊されていたが、棺身と棺蓋の一部が残っており、それによれば切妻式屋根をした家形石棺である。調査時の計測によれば石棺身は長250cm・幅110cm・高さ60cmであり、これに棺蓋を載せると90cm程の高さである。石材は板灰岩（伊豆石）である。出土遺物は馬具類・武器類等豊富であり、出土状態より3体の埋葬が考えられるが、石棺は古墳築造当時のものと考えて良いようであり、7世紀中葉に位置づけられる。石棺は現在長泉町中央公民館に保管されている。調査者が述べているように工事中の発見であり、棺身は大きく破損している。棺蓋は現存していない。現状は破損部分をモルタルで補修しており、表面の風化も激しく、製作時の表面等の細い観察は不可能であった。従って計測しながら岡上で復元する事にした。24図に示したもののがそれである。

棺身は割り抜式であり、長さは外縁で242cm、幅は98cmでほぼ長方形である。高さは片方57cmで他は49cmであり、傾斜している。又割りの部分は長さ口縁部で208cm、底部で201cm、幅は同じく72cmと68cmである。深さは両端それぞれ口縁から39.5cm・40cmであり棺身の傾斜には沿っている。

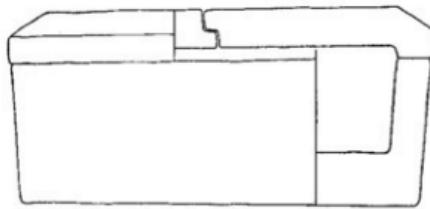
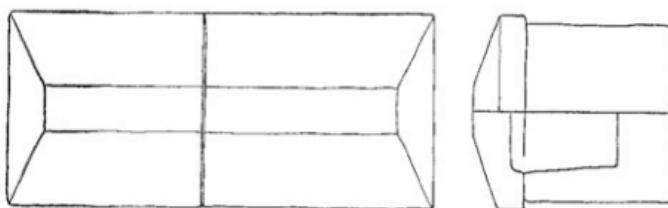
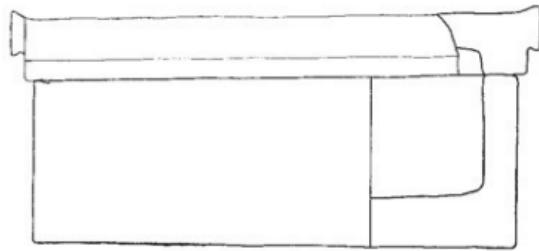
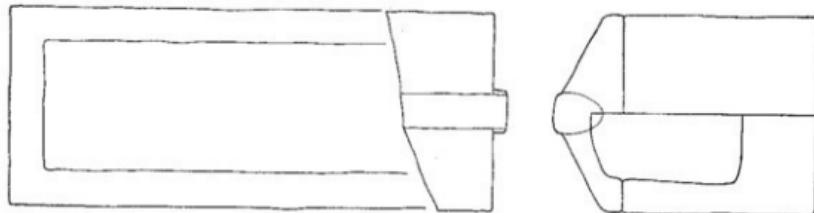
4. 平石4号墳

所在地 田方郡大仁町守木字平石

文 献 小野真一・薮下浩「平石4号墳」大仁町教育委員会 昭和48年

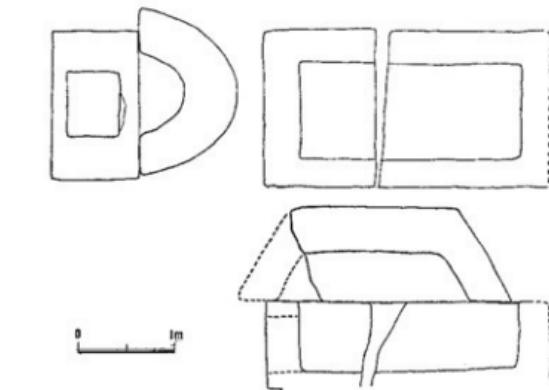
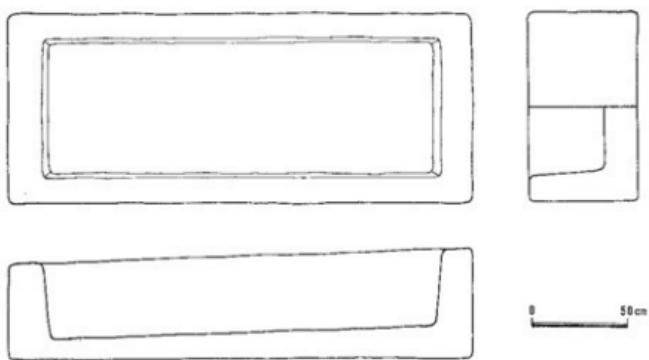
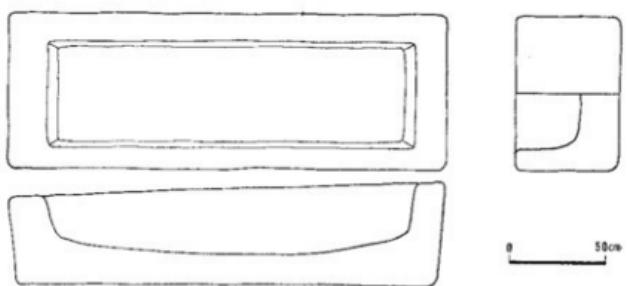
狩野川流域の平野を埋んだ守木の丘陵上にある。墳丘の規模は明確ではないが径12m程の円墳である。主体部は横穴式の石室であり、玄室6.35m、幅1.2～1.4m程である。玄室内の中央部に石棺がおかれている。棺身は7枚の切石による組合せ式であり、棺蓋は2枚によって作られていたようであるが、1枚は尖なわれている。棺蓋の幅は93cmであり、厚さ22cmである。家形石棺と呼ぶには棺蓋が偏平であり、おそらくそのままであるが、中央部に棱（掠）があり、退化した切妻形石棺と見れなくもないで、一応挙げておいた。出土遺物等から7世紀中葉とすることができる。

古墳の内容と出土状態の判明しているのは以上であるが他に石棺のみが残っているものがある。



第23図 家形石棺実測図 1

上 鮫森の右棺
下 山の神道古墳出土右棺



第24図 家形石棺実測図 2
上 下土野新屋後1号墳出土石棺
中 下土野西1号墳出土石棺
下 潟石棺

それらについて現況を観察し、簡単に述べて見よう。

下土狩新屋後1号墳

所在地 駿東郡長泉町下土狩

古く出土したものであり、古墳については記録がなく不明である。地元での記録によると明治37～8年頃に発見されたもので、大刀三振が副葬されていたとの事である。石棺のみが現在長泉小学校に保管されている。棺身のみであるが凝灰岩の割り板式の石棺であり、この地域の凝灰岩を使用した割り抜式の石棺がほとんど全て家根形の棺蓋を持つ事を考えると恐らくこの石棺もそれに含めて考えてよいであろう。石棺は中央部で大きく割れており、又表面の風化も激しい。從って表面の詳しい観察はほとんどできない。石材は凝灰岩（伊豆石）である。石棺は外幅で全長228cm・幅80cmの長方形を呈している。高さは一方の端で54cm、他方が45cmであり、上部が多少傾斜している。内側の割り込みは長さ192cm・幅55cmで、縁は四側共に幅が異っている。又深さは中央部分が34cmと最も深く、両側はそれぞれ26cm・22cmである。石棺の年代等について現在直接知る手がかりは無いが、先に触れた下土狩西1号墳の石棺と比較すると棺身の長さが多少長く、高さが少し低い事を除くと良く似た形をしている。ただ石棺の割り抜については多少異なるが、石棺表面の風化が進んでいる事もあり、注目する程の差ではないと思われる。從って多少危険があるが年代的には土狩西1号墳とはほぼ近い位置に置く事ができるかもしれない。

船塚の石棺

所在地 駿東郡長泉町上土狩

土狩船塚の旧岩崎邸の庭に露出していた石棺である。おそらくこの近くにあった古墳が破壊されて出土したものであろうと言われているが詳細は不明である。現在長泉町中央公民館に保管されている。石棺は切妻式の屋根を持った家形石棺である。棺蓋は一部を残しているのみで大半は欠失している。切妻式の屋根の妻の部分に繩懸突起を一つ持っている。当然1対を成すものであろう。繩懸突起の部分は蓋頭部より稍々上に出ている。蓋の幅は104cmであり、厚さは32.5cmを数え、蓋の裏側は割り抜いている。又蓋頂部に18cm程の平坦部を持っている。棺身は外幅部で長さ255cm・幅104cmであり、幅は棺蓋と一致する。高さは92cmであり、蓋の部分と合せると128cmである。割り抜部分は長さ219cm・幅68cmで、深さは中央部分が最大で64.5cm両端部は59.5cm及び53cmである。底になるに従い多少広がり気味である。内部にノミの痕が残っている部分があるが、それをさらに整形している。

山の神道古墳

所在地 駿東郡長泉町中土狩

文献 「郷土の研究」 長泉尋常高等小学校 昭和6年 崇

この古墳は昭和初期に道路工事に使用する目的で破壊され、その時に石棺が発見されている。古墳についての記載から整理すると、規模は不明であるが恐らく円墳であろう。主体部は横穴式石室を持っており、鉄鎌・鉄刀等が出土している。又須恵器も出土しており竈の見取図が描かれているが、それによれば恐らく7世紀代のものであろう。

※ 「郷土の研究」はほとんど現存するものがなく、昭和36年に長泉町教育委員会が保存用として復刻・整本してあったものを使用させていただいた。長泉町教育委員会の諸氏に感謝する。

石棺は現在長泉小学校に保管されており、1部破損しているか計測には充分たえ得る。棺蓋は2枚よりなっており、長さは各々103cmと122cmであるが、合せると225cmで棺身より少し長目になる。幅は共に102cmである。四柱造りの形をしているが、蓋頂部に幅24cmの平坦部分を持っている。二枚の蓋の組合せは両者共に1部を削り組合せている。蓋の高さは25cmであるが裏側も深さ7cm程に削り抜いている。棺身は長方形であり上で221cm、底部で210cmと下部が少し短くなっている。高さは両端が77.5cmと73cmで多少高低差がある。削り抜いた部分は縁に近い所で長さ190cm・幅64cm底で長さ170cm・幅58.5cmと底が少し狭くなっている。又縁は長側は共に15cm、短側で15.5cmの厚さで残している。全体にていねいに作られており、ノミの痕等はきれいに整形されて見えない。保存状態も良い。恐らく模灰岩であろうが、鮎塗の例と共に他の石棺とは多少異なるようである。しかし石材の分析は未だ実施していないので判然としない。

洞 石 棺

所在地 田方郡伊豆長岡町洞（丸山園内）

文 献 「静岡県史」 静岡県 昭和5年

横口式の石棺として古くから知られているものである。現在墳丘等は全く判らないが、恐らくかつては墳丘があり、それが何らかで消滅し、石棺のみが残ったものであろう。明治中期には石棺があったと言う話が記されているが、明治35年大野震外氏により紹介された時は最早墳丘・石室等は全く残っていないかったようである。石棺は丘陵の斜面に中ば埋もれているので、実測の不可能な部分がある。24図に示したものは斎藤忠頼が昭和26年にスケッチしたものである。借用させていただいた。石棺身は中央部で折れしており、前半分がせり出している。又棺蓋も全体がずれて前に出て来ている。石棺の内側で長さ217cm・幅は50cm・高さは棺身は90cm、棺蓋部を合せると191cmになる。又蓋部内側も削り抜いている。全体に苔が生え、石材は判然としないが、恐らく模灰岩であろう。全体にていねいに作られている。

以上簡単に家形石棺と石棺を出土した古墳について述べたが、次にこれらについて注目すべき点を2・3述べて見る事にしよう。

石棺の石材は理科学的分析を終っていないので詳細な点であるいは誤りがあるかも知れないが、外見上の観察によれば全て模灰岩（伊豆石）で作られている。この地域の箱式石棺が地元で産出する安山岩の板石を使用しているのに対し、遠くから石材を運んでいる事が注目されよう。石棺の石材がかなり遠くから供給されている事は間壁忠彦・葭子両氏によって述べられている（間壁1974）ところであり、これらの石棺も伊豆の模灰岩を使用している事が考えられよう。加工のし易い石材を選んでいる事は当然考えられるが、同時にそれのみでなく、何らかの政治的意味をも考える必要があろうし、この地域の古墳と伊豆石の切り出しの時期等が問題になろう。中でも静岡平野に位置する賤機山古墳・丸山古墳の場合は、その距離と時間の両者からの検討が必要であろう。

家形石棺を持った古墳のうち年代のはっきりしている古墳は4つであるが、賤機山古墳の6世紀後半を除けば他は7世紀に入ってからの古墳であり、伊豆石の開発の時期をそれに連動させて考え

る事が出来よう。又賤機山古墳・丸山古墳・下土狩西1号墳等内容の知られている古墳はその地域の有力古墳である事は注目すべきであろう。又ここで横穴式石室として挙げた12例のうち、実に12の6例が土狩古墳群に集中している。静岡平野の賤機山古墳・丸山古墳を別にすれば、この比率はさらに高まることになる。この事は同時に土狩長塚古墳・御戴上古墳に代表されるように箱式石棺を持ち、副葬品の豊富な古墳群の多い事と合せて、この古墳群の性格を考える上で充分検討する必要があろう。特にこれらの古墳の多くが7世紀を中心とするものであり、いわば後期後半の古墳であるのに対し、この古墳群が後期前半に属する有力な古墳を持たないらしい事も、注目して良いであろう。又この地域の家形石棺の形態が、地方の独自性を持つと言ひながらなお境内の家形石棺の変化の大勢に大きく外れるものでない事は、同じ後期の古墳群でも時に土狩古墳群の被葬者達が6世紀末～7世紀にかけて、新たに境内の政権に強く接触を持った勢力である事を示していると考えて良いであろう。

それに対し大師山1号横穴の石棺・洞の石棺等、伊豆の家形石棺は形態的にも土狩古墳群等に出土するものとは異り、形態的にも齊一性がなく異質な性格を持ったものである事が理解できる。

※ 図示した右棺の実測は平林将信氏の実測によるものである。実測図の傍用等種々御座をいただいた、感謝する。

3 横穴掘壁の工具について

本横穴群は、江の浦横穴群・多比横穴群をかかえる大平山(356m)の基盤である江の浦凝灰岩をうがって造られている。木横穴群は柏谷横穴群等の他の周辺の横穴群に較べると壁面の整形はかなり荒く、ノミ状の工具²の痕跡が明瞭に観察される。

※ 広義のノミ状の工具という意味で用いた。道具としては、いわゆるノミ・ヤリ・ガンナの他にタガネ、ある種の鉄斧も含まれるであろう。

ノミ痕の幅は、3cm、3.3～3.5cm、4cm、4.5～4.6cm、5cmの5種類が認められ、その形状はすべて平ノミ様のものである。ただ8号横穴に部分的に切り出し状の刃のものが認められるが、これも刃の付け方によるものか、使用法によるものか、例がすくなく判然としない。その刃部は3号横穴に残された痕跡より復元すると、片刃で刃縁は直線刃あるいはそれに近いもので、刃の両端は使用によりすり減り丸味を帯びているものも認められるが、基本的には弧状の刃線をもっていたものとは考えられない。各横穴との関係は別表の通りである。

中川成夫氏は大仁町宗光寺横穴群の調査において「今日痕跡をとどめている刃物のあとから掘壁のさいは、少なくとも三種類程度の道具（刃物）が使用された」と観察しているが、整形の比較的よい宗光寺横穴群において三種類程度であり、本横穴群中最も整形のよい1号で3種、2号、8号とも2種類しか観察されておらず、案外に工具のバラエティはすくなかったのではないだろうか（中川・岡本1966）。

3号・4号・5号・6号・10号は整形が悪く側壁や天井には、長い筋が何本も残され凸凹が著しい。これはノミを斜めに使用したもので、このため入口から奥壁方向に長く回んだ筋が何本もつけられている。（図版第28～E,F）整形はこのために出張った凸部分をノミを普通に平に使うことによって削り取り平滑にしたものと考えられる。が本横穴群の場合、その大部分は最後まで十分に

整形されず使用されている。さらに丁寧なものはこのうえにノミを上から下への方向に使用して仕上げている。本横穴群では1号と8号にわずかに部分的に認められる程度である。このように本横穴群ではノミの使用の方向は、側壁及天井では入口から奥へむかって、奥壁では上から下へが基本的である。

※ この段階で使用されたものには、この付近では白石横穴群(伊豆長岡町白石・三義石内)等に類例がみられる。

石工技術も原理的には木工技術と同様であり、またこの横穴群をうがった岩盤が比較的加工の容易な凝灰岩であることなどより、横穴の掘削工具も基本的に木工具と大差なかったものと考えられる。奈良県五条猫塚古墳出土例のように、金槌とノミが基本的な用具であったろう(綱干・1962)。10号横穴の東側には、1辺約80cmの方形で垂直に岩盤を整形した部分がみられる。これにも非常に不明瞭ではあるが、幅4~5cmのノミ状の工具の痕跡がわずかに認められる。これが横穴の掘削を予定しておりながら、なんらかの理由で捨てられたものとすると、荒加工の段階も同様の工具が使われたとしてよいであろう。※

※ 箸を使用している例もあるが、本横穴群ではその痕跡は認められない。

またノミというよりも、チョウナの使用を推定している例もあるが、板状を呈し片刃と思われる事、幅が3~5cmと比較的広いものであることなどを考え合わせると十分想定できることであり、本横穴の場合もある種の鉄斧あるいは手斧を想定することは十分可能であり、むしろこのような工具を考えたい。ここではこのようなものも含めた上のノミ状の工具としておきたい。

本横穴群は、その掘削において多種類の工具は考えられず、斧あるいはノミ状の工具で荒加工され、5・6・10号等はそのまで使用され、他のものも同様の工具で若干の仕上げの手が入っているものの、1・2・8号を除けば完全に仕上げられたとはいいがたい状態で使用されたものと思われる。

ノミ痕と各横穴との関係

使用ノミの刃の巾					整形の状態	備考
	3cm	3.5cm	4cm	4.5cm	5cm	
1			○	◎	○	良好
2			○	○		良好 天井及側壁は1分に較べ荒い
3			△		○	不良 天井・側壁は整形されず筋が残る
4	○		○			不良 タ
5			○			不良 タ
6	○	○				不良 タ
7	○	○				側壁の整形良好
8	○	○				良好 天井の整形悪し
9	○			?		良好 調定できたものはわずか。幅5cmは1例であり疑問
10	○					不良 側壁は整形されず筋が残る
凡 例	④多く使用されている ○使用されている △わずかではあるが使用されている			1) 3.5cmとして括したが10号は3.3~3.4cmで6~8号横穴のものとは異なるであろうと思われる。 注 2) 表面細部であるのは、はたして當時のものであるかは疑問が残される説であるが、ここでは明らかに後代のものと認められるものを除き一括同列にあつかう。		

VII 大師山横穴群の特質

1

大師山の名は弘法大師が経巻1千巻を収藏したという大師窟の名と関連して、古くから土地の人々に伝承されていたものらしい。そして、小字名もまたこの名によってきた。明治35年に発表した大野延太郎（雲外）氏の報告「伊豆国横穴を観る」（『東京人類学会雑誌』18—200）の中に、北江間村小字珍場「大師山」高台の崖といいう表現を用いていることも、土地の人々からの聞き書きによったものであろう。この山の頂きに近い南傾斜面に横穴群が存するのである。今回の調査においては埋もれたままほとんど開口していないものをも確認し、すべて10基を数えたのであったが、その中、山に面して向って左に存するのが、従来大師窟と銀治窟と呼称されていたものである。この2つの横穴は、江戸時代から知られており、既に本文の1序で紹介されたように、『豆州志稿』にも掲載されている。その後、明治年間からは特色のある横穴として、「江間の横穴」（江間は旧村名）或いは「珍場の横穴」（珍場は旧部落名）として学界に周知されていたのであった。大師窟といわれてきたものは向って左端にある関係で、我々は1号横穴と呼び、これに隣接して存する銀治窟を2号横穴と呼ぶことにしたが、この1号横穴は、広大な内部構造の中央部に掌々とした家形石棺が安置されているものであり、しかもその構造突起部に当るところに特色があり、また棺身を床面に据える場合、床面を棺身に沿って溝状にほりこむなどの施設が見られ、一隅には円い小壇のうがたれているものである。2号横穴もまた玄室の奥壁に沿って高壇をつくり、この部分に棺身を割りこみ、しかも切妻形の1枚石から成る棺蓋を施すものであり、特殊な構造を示すものである。近年、各地において多くの横穴の調査が行われ、その資料もまた多数に上っているが、このようなそれぞれの特色をもつ2つの横穴が並存している示例には接していない。したがって、現在なお學問的に高い価値は失わない。曾て、高橋健次博士が大正4年に「伊豆国田方郡北江間字珍場の横穴」（『考古学雑誌』5—2）と題して発表し、大師窟について「今日までは確に天下一品なり」と述べ、銀治窟についてもまた「蓋もまた海外無比の例ならん」と記したが、私は今日もまたその言葉は過言でないと思っている。

このように重要なものがいたにもかかわらず、この保存又は顕彰については、従来、地元においては必ずしも積極的ではなかったようである。私は、かねてからこれらの横穴の重要性を強調していた長田実氏とともにその積極的な保存対策について、町当局と県教育委員会に獻言していたが、地元の教育長津田重行氏（現助役）や文化財保存関係者の各位の熱意とともに、県教育委員会において保存のための基本的な調査が実施されることになったのは幸いであった。私は調査期間中、県教育委員会の平野吾郎氏や佐藤達雄氏と現場にいたが、今回両氏の努力によって原稿がまとめられた。私は、終りにこの原稿にもとづいて整理し、若干の感想を述べることにしたい。

2

大師山横穴群は、10基から成っている。私は、現地で調査している間に、その数の確認について

も努めたのであったが、現在のところ、他に開口しているもの又は開口されていた痕跡のあったものは見出しえなかつた。したがつて、10基から成つてゐることをみてよい。その中最も特色のあるものは、早くから有名な大師窟（1号横穴）と般若窟（2号横穴）であり、この横穴群の中核的な存在といつてよい。しかし、今回の調査によつて新たに8号横穴も重要な内部構造をそなえることがわかつた。これらについてその大きさなどを平野氏等の資料にもとづいて表示すれば、次の通りである。

横 穴 番 号	玄室の大きさ			造設施設の有無	副葬品の有無	追葬の有無	推定年代
	長さ	幅	高さ				
1号	6.20m	3.50m	2.85m	家形石棺	無し	有り	7C中
2号	4.50	3.05	2.33	ク	ク	不明	(7C中)
3号	3.70	1.10	1.21	無し	不明	ク	(8C前)
4号	2.35	1.18	0.70	ク	ク	ク	(8C前)
5号	2.90	1.35	1.20	ク	ク	ク	(8C前)
6号	2.50	1.20	1.05	ク	須恵器	ク	8C前
7号	—	—	—	ク	不明	ク	(8C前)
8号	4.50	2.80	2.30	剥抜棺身 2個	須恵器・土師器・鐵鍬	有り(3回)	7C前
9号	2.10	1.23	1.32	無し	須恵器・かま	有り(1回)	8C前
10号	2.25	1.32	0.95	ク	無し	不明	(8C前)

1号横穴は、玄室の広さは奥行6.20m、間口3.50m、高さ2.85mという大きいものであり、ことに高さのいちじるしい点は稀に見るものであるが、これは中央に家形石棺を据えるための構造上の関係もあったであろう。床面中央に主軸と平行に長方形の輪郭をなして、あらかじめ掘りうがたれた溝状の施設の内部に棺身を据えたのであるが、この棺は、凝灰岩によって造られた家形石棺であり、棺身の1辺1.10m、他辺2.40m、高さ1.53mという雄大なものであり、棺蓋もまた上部はややゆるやかであるが、一種の切妻形を示している。既に高橋健自博士も指摘しているところであるが、ことに棺身・棺蓋とともに凹端いすれも縄掛突起にあたる部分は、円形に浅いくぼみがほどこされている。もっとも後世の盃掘孔により変貌しているが、ほぼ旧規がうかがわれる。縄掛突起の遺制をとどめる遺化形式を示すものであろう。

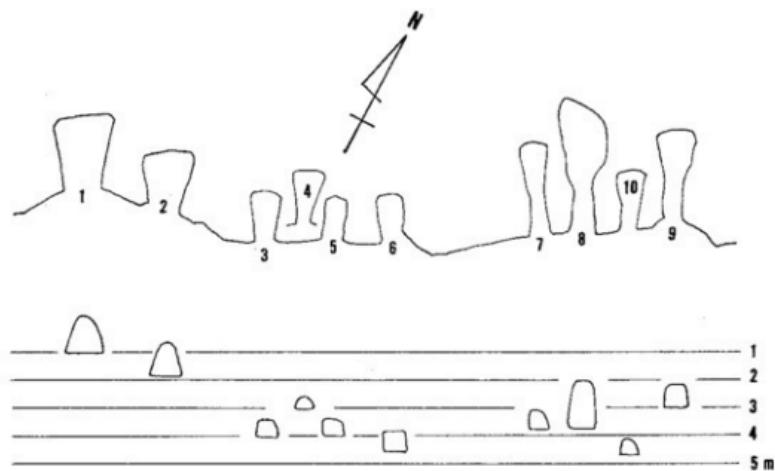
石棺が造りつけでなく、横穴内に据えられた例は全国的に必ずしも稀少でもない。地元では万法院山横穴の例でも、小さい石棺の存したことが報告されており（『静岡県史』1）大阪府柏原市玉手山安福寺横穴群の中でも、棺身に当る部分は彫り抜きであるが、棺蓋は4枚の凝灰岩から成る家形のものであったことが報告されている（『玉手山安福寺横穴群調査概要』）。島根県大原郡加茂町大字岩倉字平田の横穴群にも板石で組み合せた棺身に、同じ板石で蓋を施した例が発見されている（『島根県埋蔵文化財調査報告書』V）。しかし、この1号横穴のような雄大な家形石棺が据えられ、しかもこの保存状態のまことに良好な例は稀有のものといつてよいであろう。

なお、この横穴の玄室の奥の一隅には小さい円壇がうがたれている。私は、この大きさや形状か

ら見て、火葬骨壺が吸収されたものとも考えたい。しかし或いは洗骨葬によったものとする考え方も却けるべきでないかも知れない。家形石棺の被葬者との関係についてはにわかに論ぜられないとしても、円墳の位置や彫り方などから見ても家形石棺が安置された墓の被葬者と無縁に、のちに利用したものではなく、同一の墓穴としての横穴に追納したものとみることが適当と思っている。もしさうであるならば、当代の墓制を考える上の重要な資料になるものであろう。

2号横穴は棺身が刳りこみであり、棺蓋が別に設けられていることに特色がある。このような例は前記、安福寺横穴群中にも見受けられるが、切妻形の屋根形の1枚石から成る棺蓋で掩された例は特殊である。この棺蓋は長さ2.20m、幅0.95m、高さ0.60mの大きいものであるが、内部にはいってみると棺蓋の内側の彫り方も雄大で、内法深さ0.20m、幅0.47m、長さ1.65mの棺身とともに、あたかも横穴式石室に置かれた大きい船形石棺に入ったような錯覚すら感ぜられる。ことに棺身の底には水抜きの溝もうがたれていて念入りな造構の一端を示している。

今回明かにされた8号横穴も、玄室は羨道からそのまま平らかに通じた床面の左右を高壇にして棺座面を造り、それぞれ棺身を刳り抜いている。しかも左右の高壇に整齊な位置で配されたものでなく、玄室に向って左にある棺身（1号）はやや奥まって存し、右にある棺身は手前の方に見られる。玄室を高壇にして棺座面となし、ここに单棺・2棺・3棺・4棺にあたる棺身をほりぬいている例は各地にもあり、熊本県玉名市穴綱音横穴の如きは棺身には高縁も設けられて特色があり、千葉県長生郡長柄町においても、この種のものは最近150例に近く存することも確認された。その他岐阜県可児郡地方にも見られる。8号墳の棺身のほり抜いた形式も同様な一例に加えてよいが、さきに述べたように2つの棺身の位置がかなり不整であることも面白い。しかも、この横穴の羨道と



第25図 横穴位置関係概念図

墓前域にあたる部分からは多くの須恵器も発見され、その年代や使用の回数なども考えられたことは特殊である。

なお、その他 2・3 の気付いた成果をあげると、9号横穴において玄門の封鎖の状態の明かにされたことがあげられよう。最近、表門や玄門封鎖の施設については、多くの示例が得られた。ことに、石川県加賀市法皇山横穴群の中には、かなり大きい石材を横づみにしたものも知られた（『法皇山横穴群』）。9号横穴は玄門封鎖の一実例を提供するものであろう。6号横穴において溝が岩盤をほりこんでかなり外に通じていることも重要である。また「前庭部」といわれている部分すなわち墓前域においても、3・4・5・6号横穴に共通的な墓前域があったのではないかと考えられたことも重要であろう。

3

以上、大師山横穴群の中、最も特色のあるものと思われる 1・2・8 号のものを中心として述べたのであるが、これらの横穴は他の 7 基の横穴とともに、どのように組成され、年代的にどのような変遷がたどられるものであろうか。本文の中において平野氏は、これら 10 基の横穴について、さらに単位群を考え、A の単位群として 1・2・3・4・5・6 号を含ませ、B の単位群として 7・8・9・10 号を入れた。しかも 1～6 号の中、3～6 号については或いは 1・2 と離すこととも考慮されるとなした。私もこの考え方方に賛意を表したい。現地で調査に関係したとき、つねにこの問題をも考えたのであったが、それぞれの距離関係や高低関係、又は丘陵の傾斜面の凸凹関係などから見ても一応は考えられるところである。ただ 1 号～6 号においては同じ単位に含ませるとしても、やはり 1 号・2 号と 3 号～6 号とを別途にとりあつかい、むしろ 1・2 号を A I 小単位群、3 号～6 号を A II 小単位群ともすることが適切のようにも思われる。

さて、これらの年代であるが、本文においてはこれらは 7 世紀前半から 8 世紀前半の間に營造されたものとなしている。またこの序列関係においては、1・2 号が最も早くあらわれて、7 世紀中頃となし、しかも 2 号は 1 号に比してやや遅れたものと考え、3 号～6 号は 8 世紀前半となし、7・8・9・10 号においては 8 世紀前半であるが、ことに 8 号においては 7 世紀中頃から 8 世紀前半の間に 4 次にわたる利用がなされたとする。この考えは、出土の須恵器の継続的な関係やその他の問題から考慮したものであり、やや落ち籠いたものとみてよい。

この地方、特に駿河湾に注ぐ狩野川の中流の地に既に本文で述べられたように、数多くの横穴群が発達しており、一方、古墳の横穴式石室内における家形石棺の発達もあるとき、この複合体ともいうべき 1 号横穴の出現は必ずしも偶然でないかも知れない。またあわせて 2 号・8 号の発達も当然みちびかれたにちがいない。しかし 1 号横穴の家形石棺の運動その他の技術面を考えても、その被葬者はかなり特殊な地位のものであったことも考えられるのであり、この地方において経済的にも有力な背景をもった人々によって營まれた墓地であることはいうまでもない。しかも、これは或る村落全体の共同的な墓地ではなく、限られた特殊な少數家族群によって占有されたものとも思われる。もしここに一つの想察を許して頂けるなら、私は 1 号・2 号をもってそれぞれ夫妻の墓とみたいのである。1 号・2 号がほぼ同じ時期のものであり、この地位関係においても接続しているこ

とを考えるとき、あたかも古墳の場合には凹凸墳の形態を示すことに相応するであろう。夫の遺骸を家形石棺に安置し、これに近接した横穴には、切妻の棺蓋を掩った倒り抜きの簡素な棺にやや時期を後にして、この妻を葬ったとすることは、果たして大胆な想察に過ぎないであろうか。従来、横穴の場合は古墳と異なり、副葬品等も明らかにされない関係で、この被葬者の家族関係などはおそらくにされ難いであった。今後この方面の検討も必要であろうが、この私見が、何等かの示唆になれば幸いである。

7世紀から8世紀にわたる終末古墳の研究は、近年活発に進められている。一方、この墳の横穴の研究にも顕著なものがある。このようなときに、従来ながい間周知されておりながら、この基本的な資料が学界に提供されず、保存措置も講ぜられなかった大師山横穴群について、実測図作製を中心とした調査が行われ、報告書の刊行になったことは慶賀に堪えないところである。

IX おわりに

49年度に実施した調査の報告とそれに關する2、3の問題について簡単に述べてきた。調査に参加した者のうちから報告を担当したが、事実の誤認、あるいは検討不足等が多いと思われる。御批判・御指摘いただければ幸である。

最後に本調査を実施するについて斎藤忠博士には直接現地指導いただき、又整理段階で平林将信氏に有益な指摘をいただいた。さらに伊豆長岡町教育委員会教育長津田重行氏を始め教育委員会の諸氏及び小野弘氏を始めとする文化財専門委員会の諸先生には一方ならない御尽力をいただいた。又地元小沢富雄氏には道具の置場等種々御世話いただいた。末筆ながら記して深く感謝の意を表しだいである。

主要引用参考文献

- 赤星 直忠 1959「横穴の副葬について」『鎌倉市史考古編』
- 細千 善教 1962『五条旗塚』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第20号 奈良県教育委員会
- 伊場遺跡調査団 1971『伊場第4次調査月報』5 浜松市遺跡調査会
- 人野延太郎(妻外) 1902『伊豆国横穴を観る』東京人類学会雑誌200号
- 岡田宏明他 1967・68『八王子中田遺跡』I~II 中田遺跡調査会・八王子文化協会
- 長田実 他 1954『古墳時代の静岡県』『静岡県社会文化史』 静岡県社会文化史編纂委員会
- 小野 真一 1957『文化財』『沼津市誌』 沼津市教育委員会
- タ 1965『長泉郷土誌』 長泉町教育委員会
- タ 1970『本宿七の段古墳』 沼津考古学研究所
- 小野真一・數下 浩 1973『平石4号墳』 大仁町教育委員会
- 絆部 慶恩 1958「集落の形成と郡都への発展過程」『三島市誌』
- 小林 行雄 1951「家形石棺」上・下 古代学研究4号・5号
- 後藤守一・斎藤 忠 1951『静岡駿河山古墳』 静岡山教育委員会
- 斎藤 忠 1962「家形石棺」『日本考古学辞典』 日本考古学協会
- 佐藤 典治 1975「古墳時代後期における横穴墓の様相」『駿台考古学論集』2
- 明治大学考古学専攻卒業記念会 1965年発表のものを収録—
- 瀬川裕一郎他 1975『江ノ浦横穴群・古墳群埋蔵調査報告書』 沼津市教育委員会
- 高橋 健白 1929「伊豆国田方郡北江間字珍場の横穴」考古学雑誌第5巻2号
- 高橋健白他 1930「静岡県の遺跡」『静岡県史』1
- 高橋 健白 1938『古墳と上代文化』 鶴山閣
- 中川成大・阿木 勇 1966「伊豆宗光寺横穴群の調査」史苑第26号2・3号
- 橋本澄夫・田嶋明人他 1971『法皇山横穴古墳群』 加賀市教育委員会
- 平野和男他 1963『掛川市地蔵ヶ谷古墳群及び横穴墓発掘調査報告』 静岡県教育委員会
- 尾藤 肇 1966「掛川市本村横穴A群発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告』
- 静岡県教育委員会・日本道路公団
- 宮本豊彦・植松家八 1966「掛川市本村横穴B群発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告』
- 静岡県教育委員会・日本道路公団
- 望月薦弘・手島四郎他 1962『駿河知川古墳』 静岡山教育委員会
- 山内 昭二 1962「三島市大場赤王横穴墳墓調査報告」 日本大学文理学部(三島)研究年報13号
- 山内昭二他 1975『伊豆柏谷穴』 静岡県教育委員会・函南町教育委員会
- 山本 清 1971「山陰の石棺について」『山陰古墳文化の研究』 山本清先生退官記念論集刊行会

図版第1

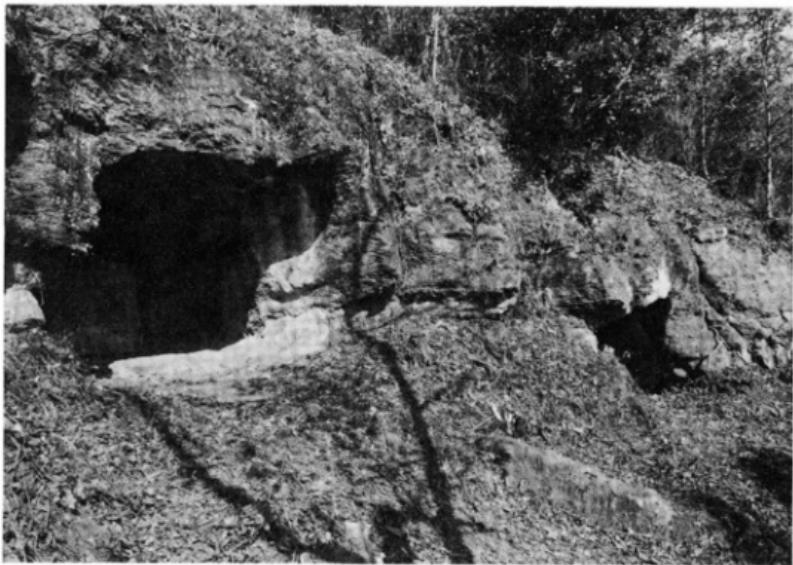


大師山 横穴群周辺の地形（航空写真）



大師山 横穴群 遠景

図版第2



1号、2号 横穴 調査前の状態



1号 横穴 調査前の状態

図版第3



1号、2号 横穴 調査後の状態

図版第4



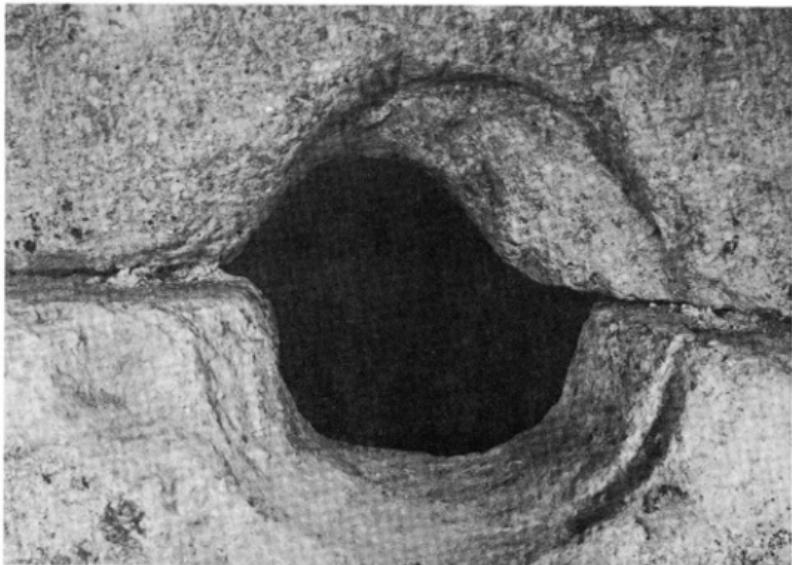
1号 横穴(正面)

図版第5

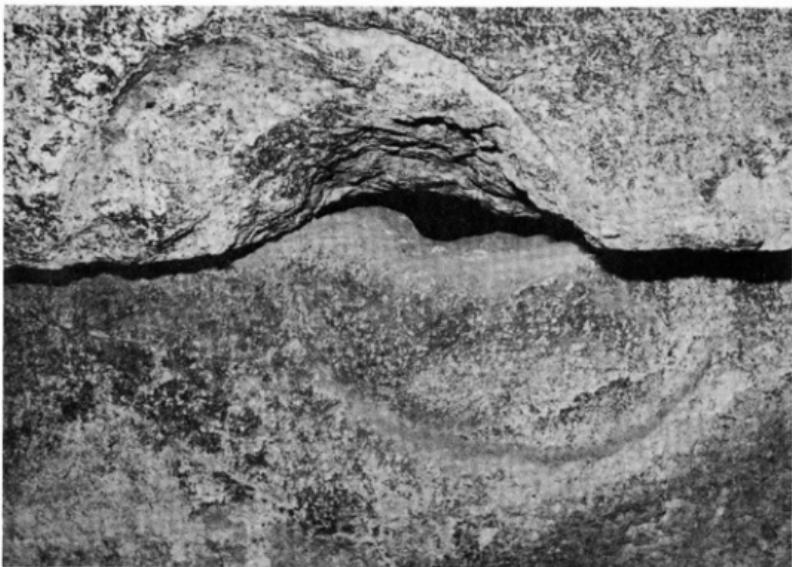


1号 横穴 石棺(正面)

図版第6

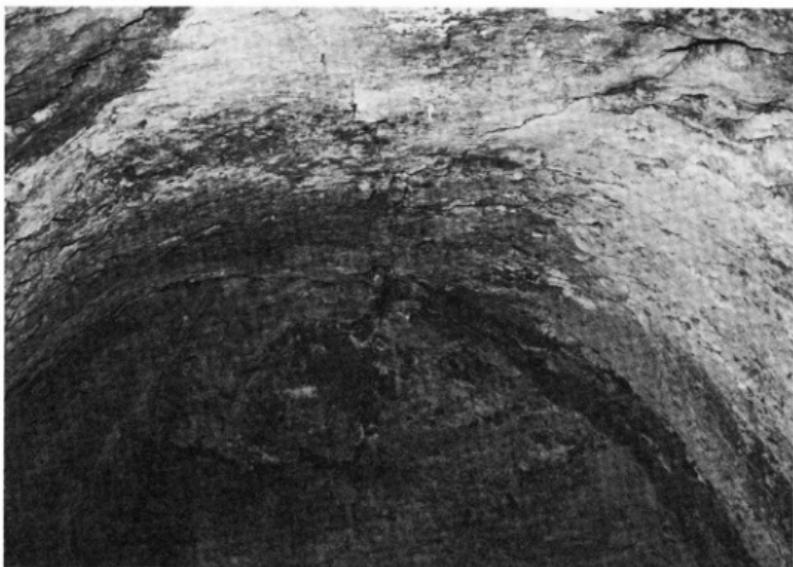


1号 横穴 石棺 掘り込み (正面)

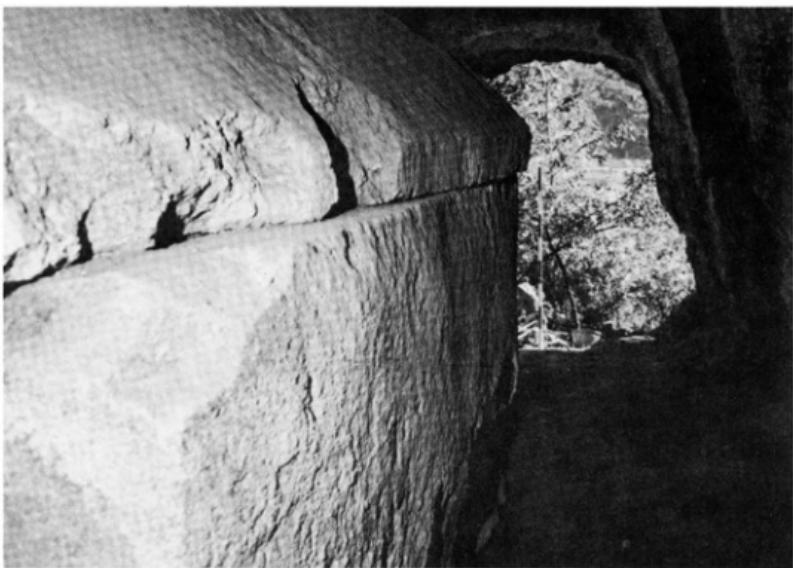


1号 横穴 石棺 掘り込み (背面)

図版第7

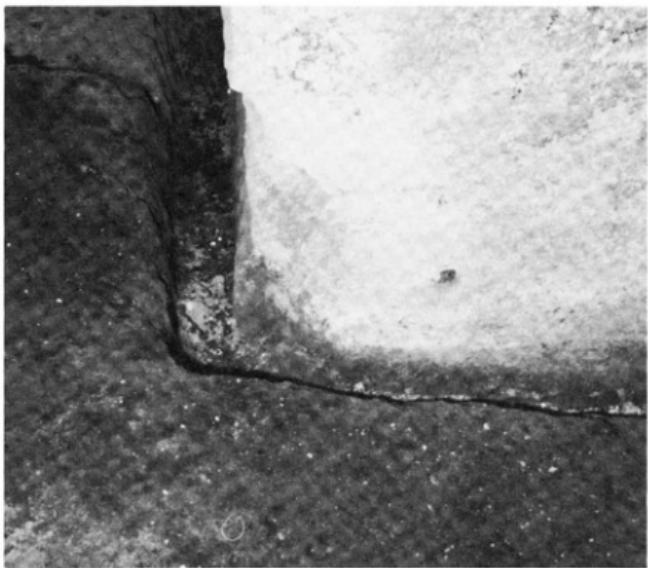


1号 横穴 天井部分

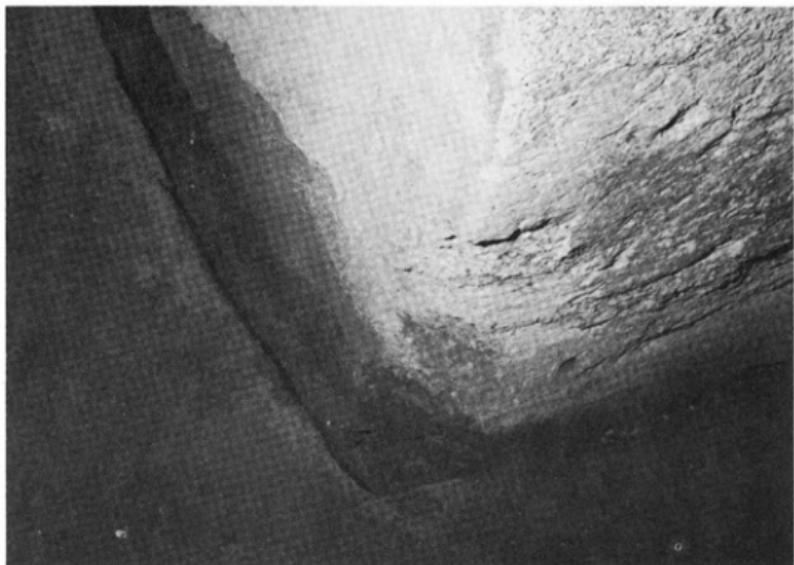


1号 横穴 石棺 (側面)

図版第8



1号 横穴 石棺・棺座

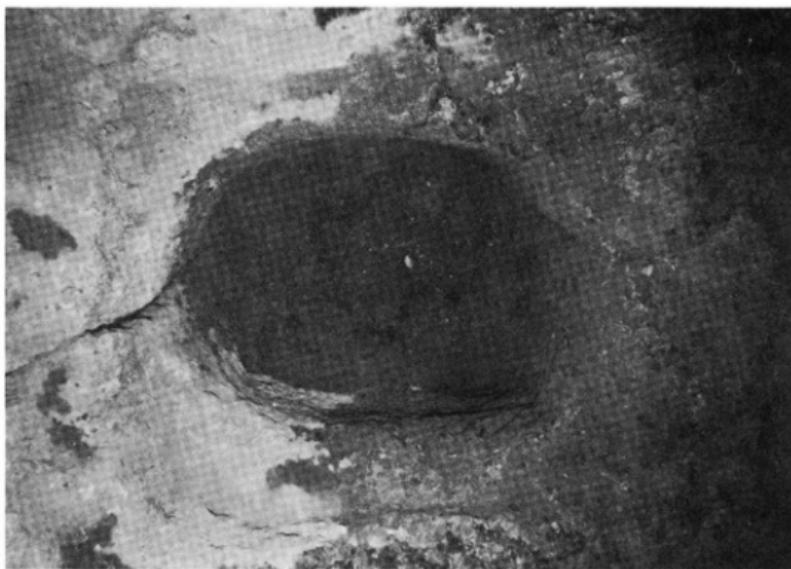


1号 横穴 石棺・棺座

図版第9

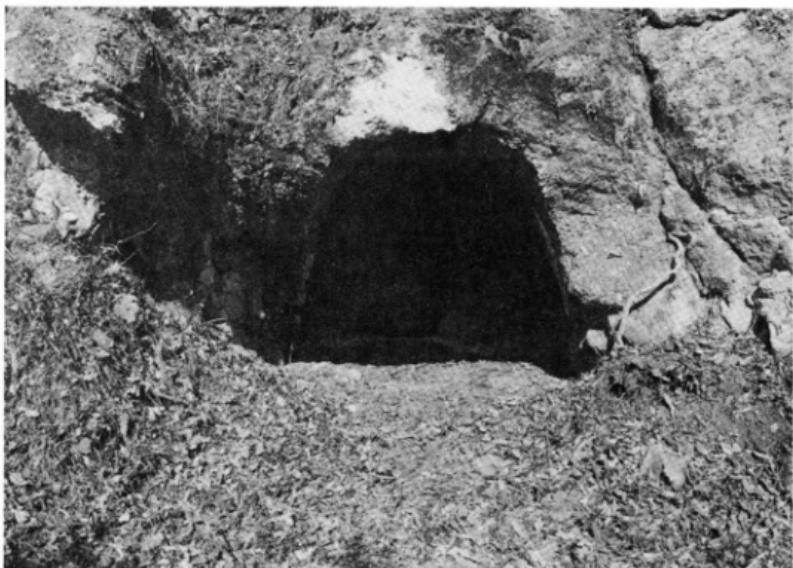


1号 横穴 石棺内部

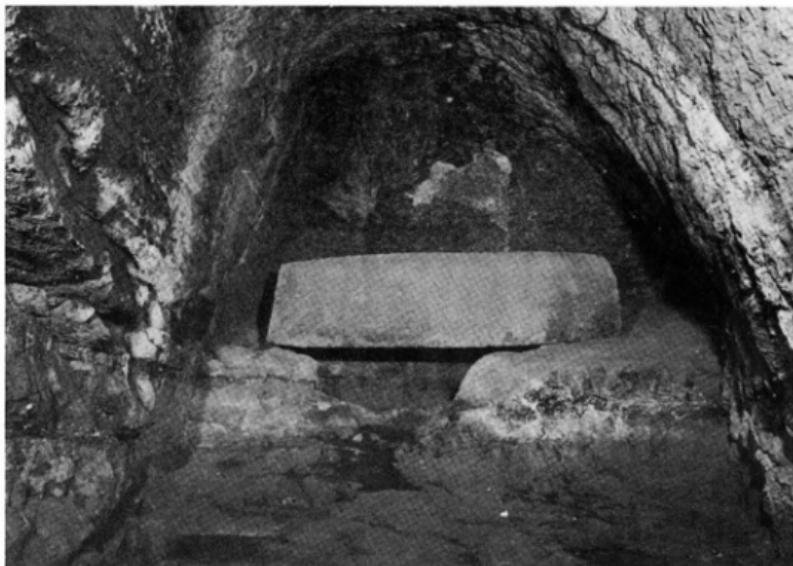


1号 横穴 小豎穴

図版第10

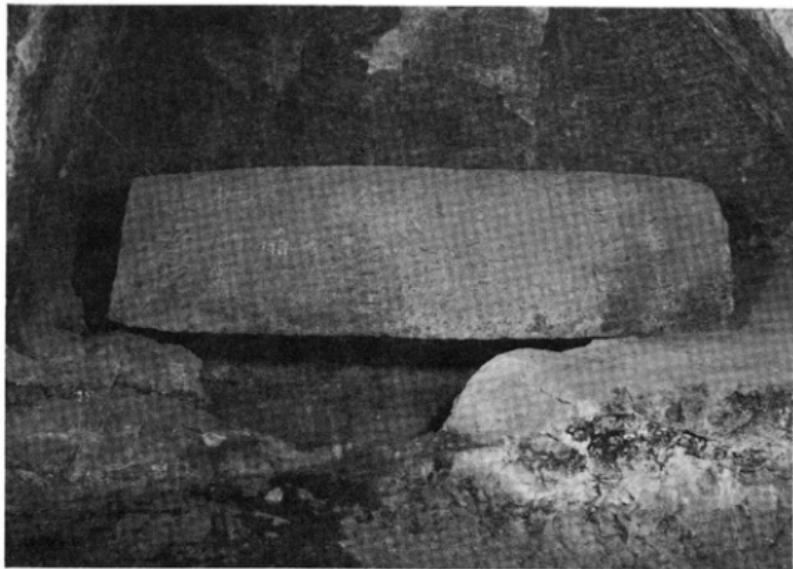


2号横穴

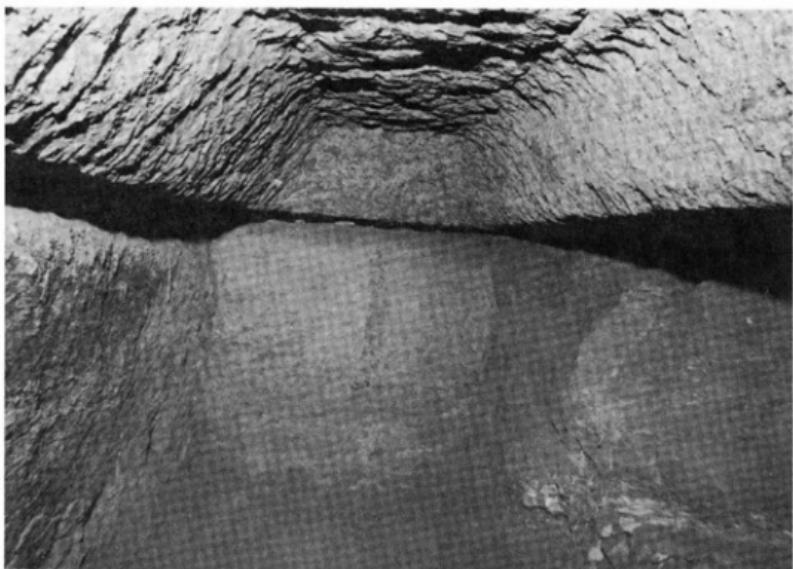


2号横穴 玄室内部

図版第11



2号 横穴 石棺



2号 横穴 石棺内部

図版第12



3号 横穴



3号 横穴 玄室内部

図版第13



4号 横穴

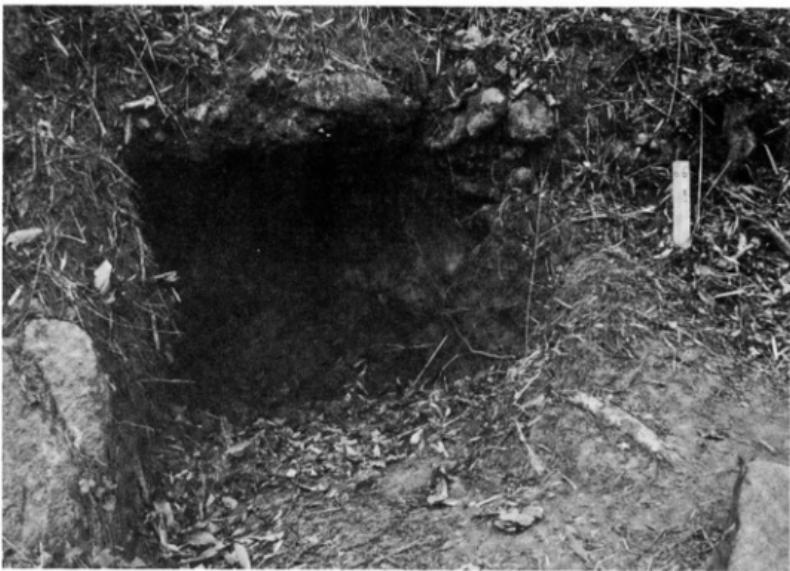


4号 横穴 内部(側面)

図版第14

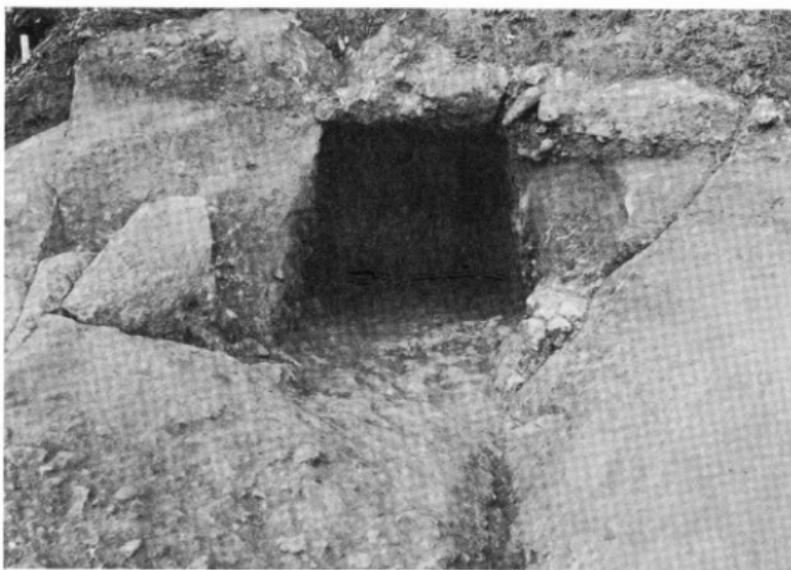


5号横穴



6号横穴

図版第15

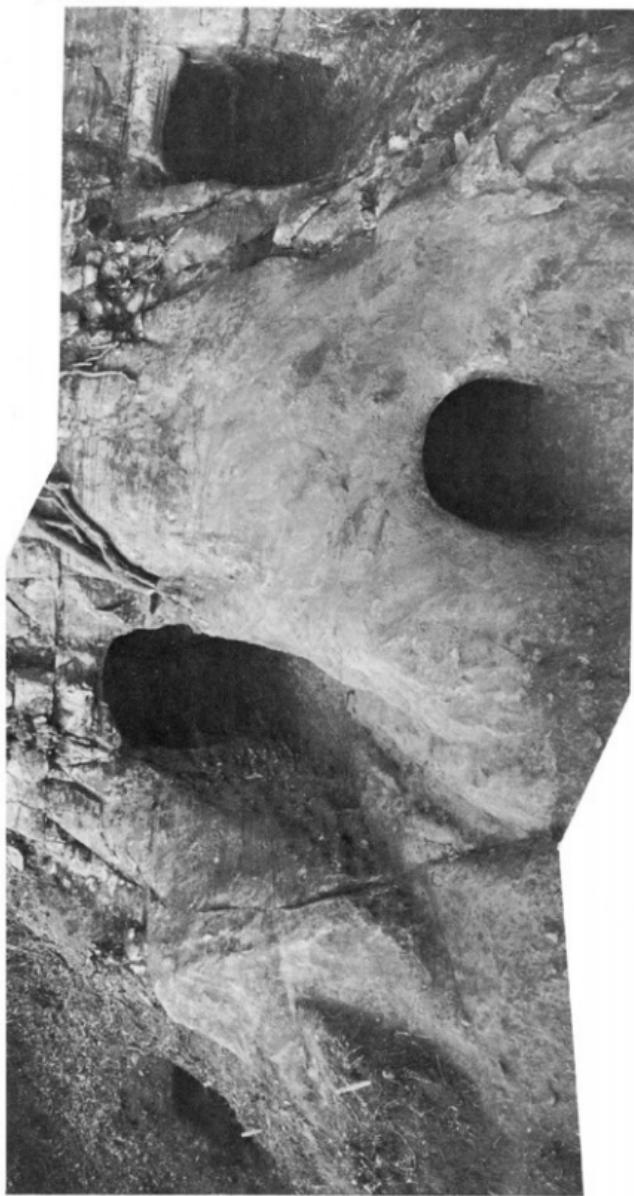


6号 横穴 調査後の状態



6号 横穴 排水溝

図版第16

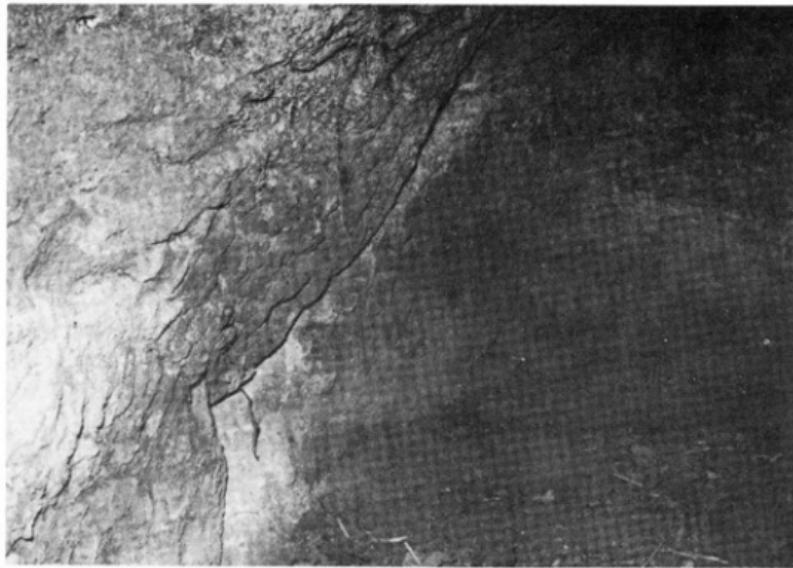


B群全景 7号(左) 8号(中) 9号(右) 10号(下)

図版第17

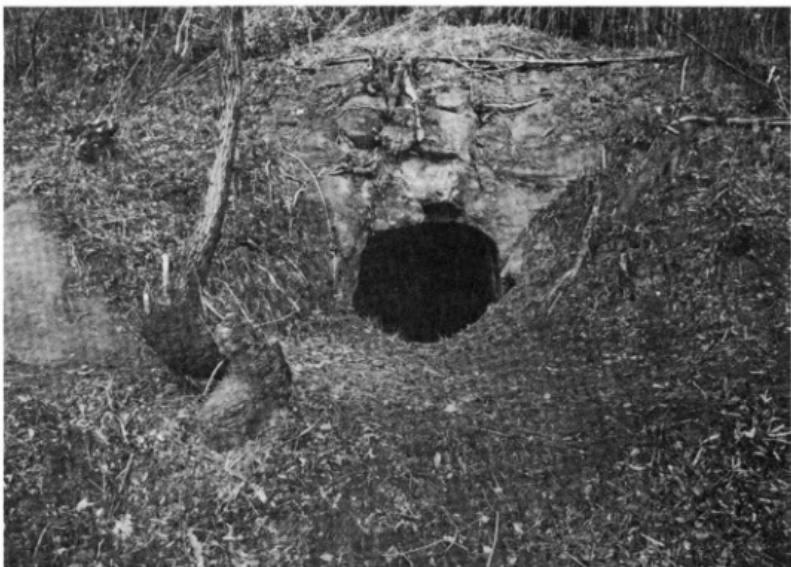


7号 横穴

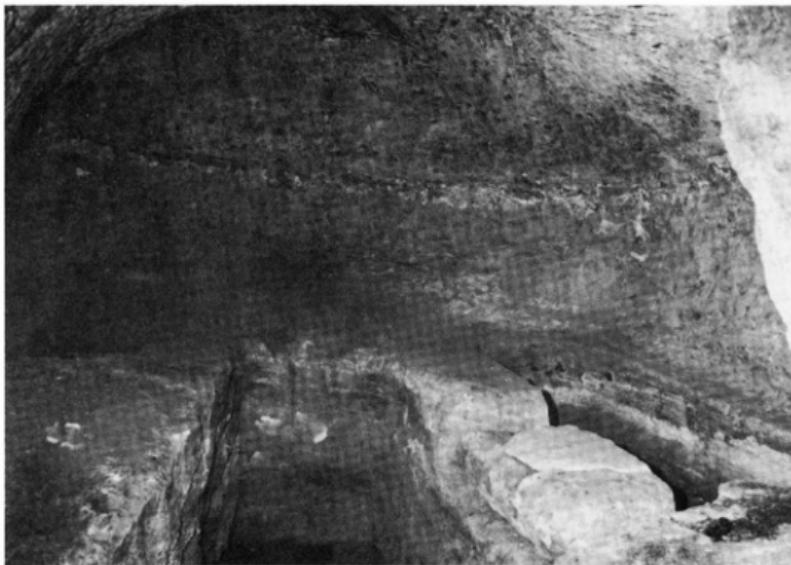


7号 横穴 内部

図版第18

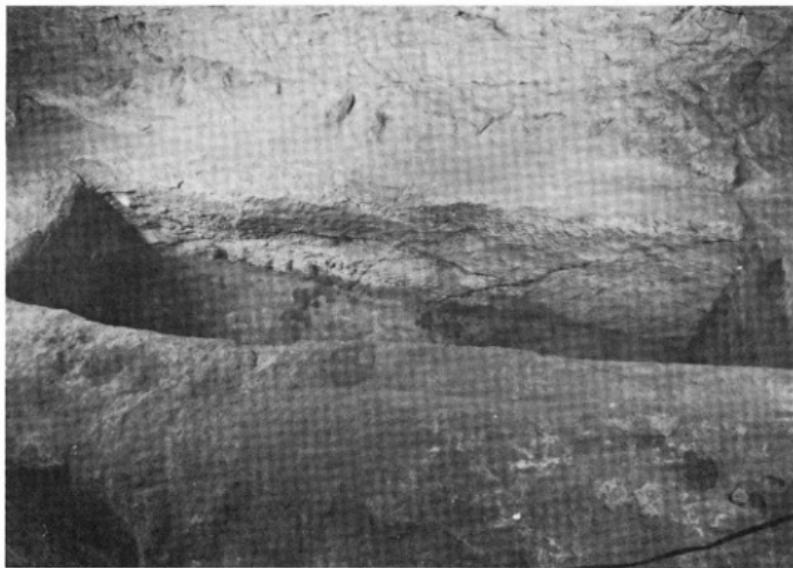


8号 横穴 調査前の状態

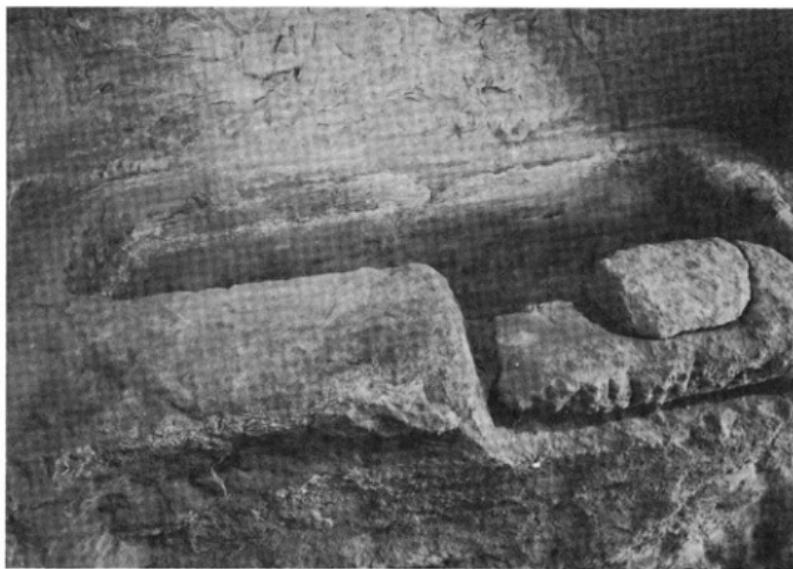


8号 横穴 玄室内部

図版第19



8号 横穴 1号棺



8号 横穴 2号棺

図版第20



8号 横穴 封鎖石



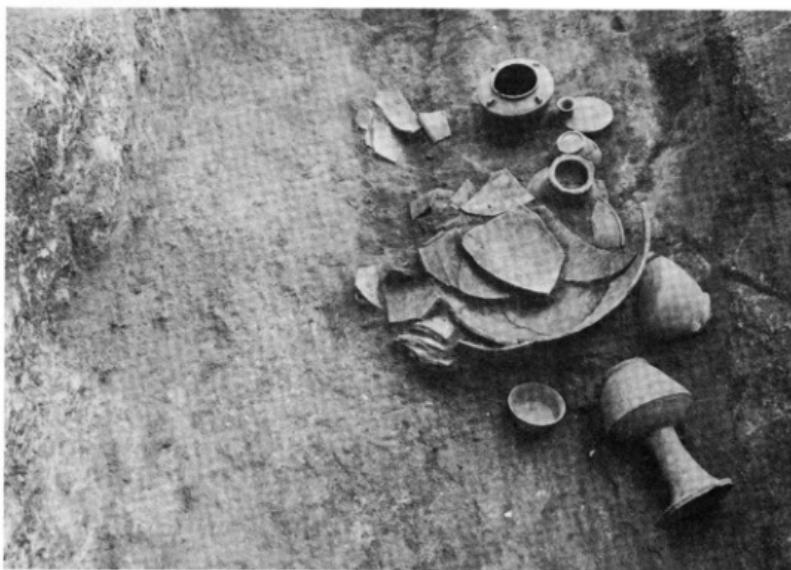
8号 横穴 調査後の状態

図版第21



8号 横穴 遺物出土状態

図版第22



8号 横穴 遺物出土状態

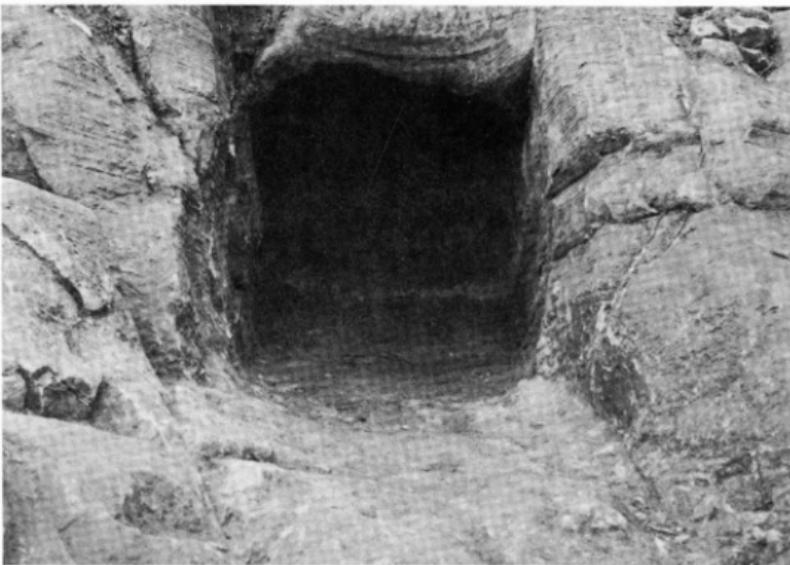


8号 横穴 遺物出土状態

図版第23



9号 横穴 調査前の状態



9号 横穴 玄室内部

図版第24

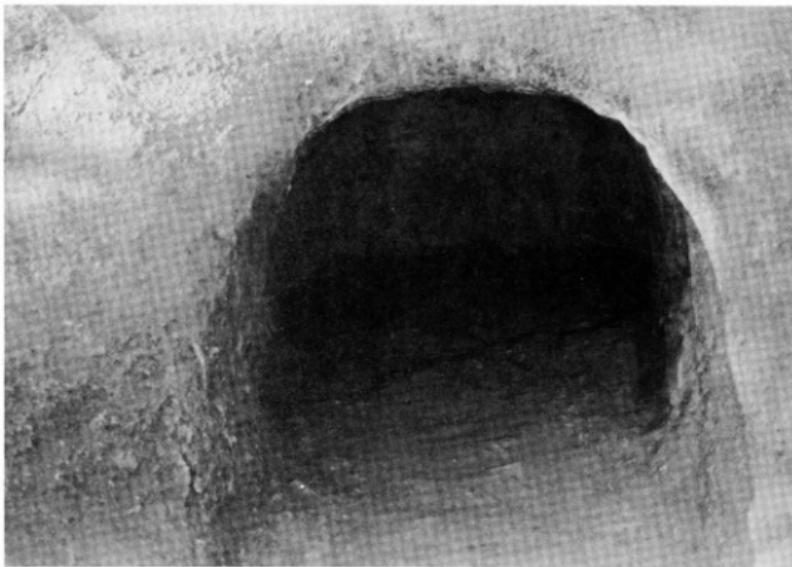


9号 横穴 封鎖石

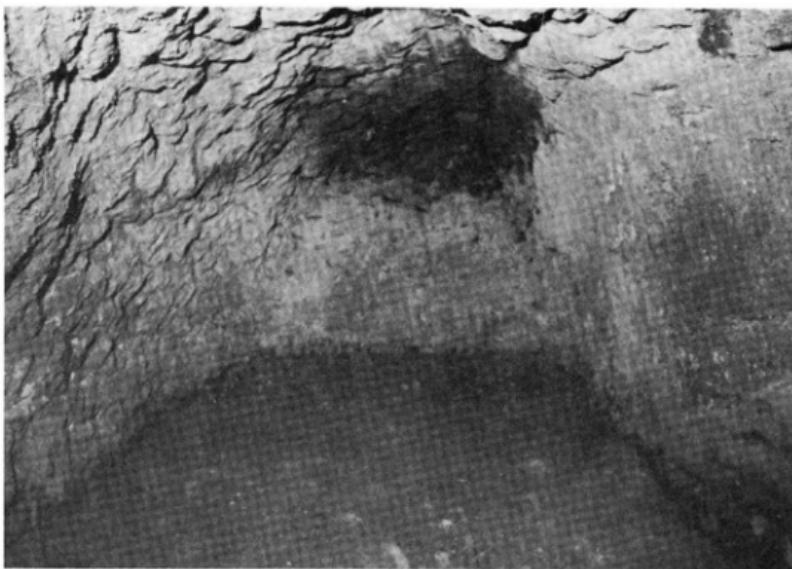


9号 横穴 封鎖石（内側より）

図版第25

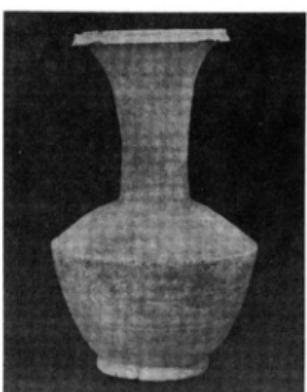
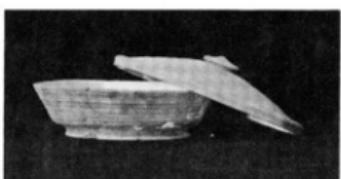
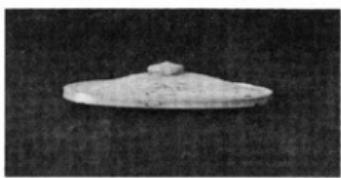
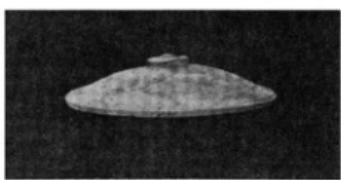
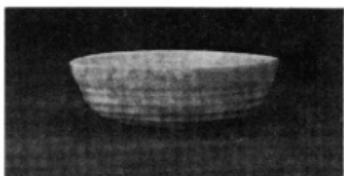
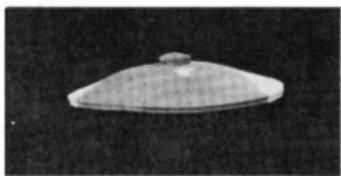


10号 横穴



10号 横穴 玄室内部

図版第26



出土遺物 1 (土器番号は実測図番号と同じ)

図版第27



19



±1



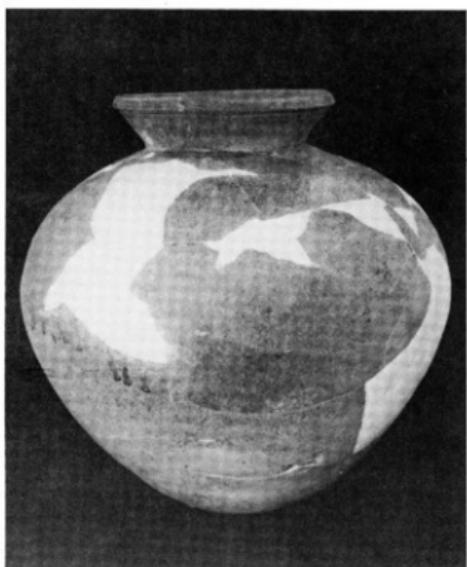
18



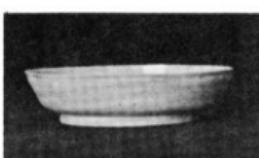
±4



21



28

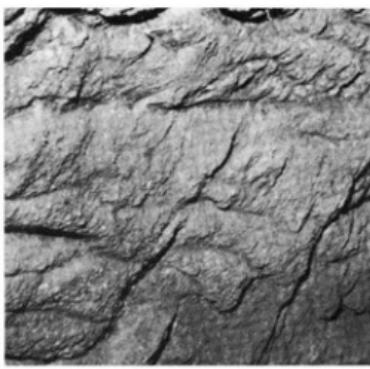
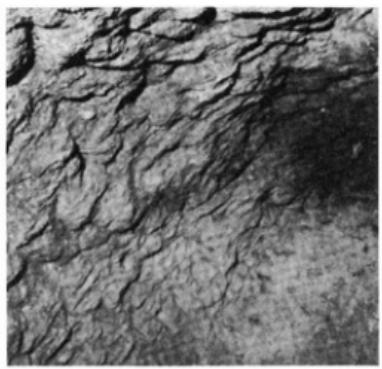
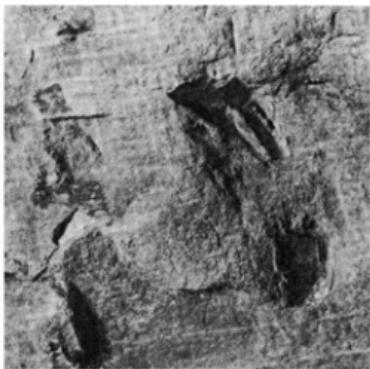
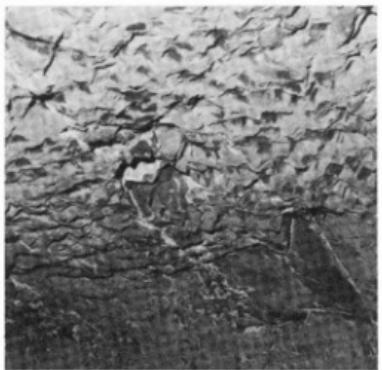


24



23

図版第28



ノミの痕跡 A～D 8号 横穴、E・F 10号 横穴

1976年5月30日

大師山横穴群

編集 静岡県教育委員会
発行 伊豆長岡町教育委員会
印刷 星光社印刷株式会社

